営業之栞

１９１４年１１月

當棗之栞

大田叢女
土井晚翠 著

清水晴風

LG70
7

募集

年齢十二三才ヨリ十八才位迄身体健全身元確實ナルモノ多數

但シ弊店ノ都合ニヨリ呉服部及卸部洋服部何レニ廻ス哉モ計リ難ク候

◎御注意

毎回御注意申上候通リ遠國ヨリノ御注文ハ務メテ御所在地及御姓名御明記願度候

5918

宣戰の大詔

詔書

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國ハ忠實勇武ナル汝有衆ニ示ス

朕茲ニ獨逸國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕カ陸海軍ハ宜ク力ヲ極メテ戰鬪ノ事ニ從フヘク朕カ百僚有司ハ宜ク職務ニ率循シテ軍國ノ目的ヲ達スルニ勗ムヘシ凡ソ國際條規ノ範圍ニ於テ一切ノ手段ヲ盡シ必ス遺算ナカラムコトヲ期セヨ

朕ハ深ク現時歐洲戰亂ノ殃禍ヲ憂ヒ專ラ局外中立ヲ恪守シ以テ東洋ノ平和ヲ保持スルヲ念トセリ此ノ時ニ方リ獨逸國ノ行動タル遂ニ朕ノ同盟國タル大不列顛國ヲシテ戰端ヲ開クノ已ムナキニ

至ラシメ其ノ租借地タル膠州灣ニ於テモ亦日夜戰備ヲ修メ其ノ艦艇荐ニ東亞ノ海洋ニ出沒シテ帝國及與國ノ通商貿易爲ニ威壓ヲ受ケ極東ノ平和ハ正ニ危殆ニ瀕セリ是ニ於テ朕ノ政府ト大不列顛國皇帝陛下ノ政府トハ相互隔意ナキ協議ヲ遂テ兩國政府ハ同盟協約ノ豫期セル全般ノ利益ヲ防護スルカ爲必要ナル措置ヲ執ルニ一致シタリ朕ハ此ノ目的ヲ達セムトスルニ當リ尚努メテ平和ノ手段ヲ悉サムコトヲ欲シ先ツ朕ノ政府ヲシテ誠意ヲ以テ獨逸帝國政府ニ勸告スル所アラシメタリ然レトモ所定ノ期日ニ及フモ朕ノ政府ハ終ニ其ノ應諾ノ回牒ヲ得ルニ至ラス

朕皇祚ヲ踐テ未タ幾クナラス且今尚皇妣ノ喪ニ居レリ恒ニ平和ニ眷々タルヲ以テシテ而カモ竟ニ戰ヲ宣スルノ已ムヲ得サルニ至ル朕深ク之ヲ憾トス

朕ハ汝有衆ノ忠實勇武ニ倚賴シ速ニ平和ヲ克復シ以テ帝國ノ光榮ヲ宣揚セムコトヲ期ス

御名御璽

大正三年八月二十三日

各大臣副署

噫國交終に斷絶す

聞け其響き、正義の轟き記憶すべき大正參年八月貳拾參日の午砲は人道擁護惡鬼叱咤の天聲となりて義に勇む旭東帝國の天邊より世界萬國無明の暗に向つて運めき渡れり噫暴戾無道の獨逸國は今や西歐の血に饜らすして來り東洋の天地に仇す、今にして之が膺懲の實を擧げすんば世界人道を奈何せん、我帝國威武を奈何せん、獨帝の所謂「戰へば貴國必ず敗れん」も是れ自ら招ぐ所是れ自ら投する所奚んぞ免れんや、奚んぞ逭るべけんや

◉ 稟告

謹啓　時下天高く馬肥ゆるの候各位御揃ひ益々御清祥に被爲渉候段慶賀至極に奉存候降而弊店不相變御厚庇に依り商運幸に順境を辿り一同頑健精勵罷在候次第感銘之至りに奉存候

陳者不振なる織物類も稍々回復的秋季開幕に入るの機に際し全歐大陸戰亂は突如として耳朶を裂き愈々擴大して東洋に波及し我帝國も平和の盟主として蹶起すべき機運に逢着致候爲めに依然財界の變調打擊測る可からざるものあり當業の如き忽ち横濱糸況の闇憺、綿糸輸出の閉塞の爲急轉直下の製品低落等、滔々として激流の底止するを知らざるの觀有之候處、茲に吾帝國の態度も正々堂々として、壯絶なる決定聲明を見るに至り愈々優勝なる地歩を堅められたれば、大局上前途大に期待すべきものあるに至り且一面歐洲航路の安全、英京金利の引下げ、日支貿易開展の好機致來等大に意を強ふするに足るもの多く悲觀危懼すべき秋にあら

さるの如く昨今實業界も沈重落ち付きの態度となり各方面とも底意健全なる樂觀と先見と抱持するの傾向を現し來り候、弊店は此場合に處し愼重熟慮、大勢を洞觀して悲觀に失せず樂觀に逸せず過般來着々仕入に着手し突發的變調を利用し而も强固なる直押に努力し最低と信するものを拔き無遺憾準備を了し候得者其弊店確信の手合は各位十二分の御滿足を得、先づ概して昨年より一割安の低直を以て提供し得へき事と信じ申候間御入用品は多少に不拘御用命被仰付度奉懇願候

營業品目

▲吳服類　▲繪絹各種
▲太物類　▲雛地物一切
▲洋物類　▲羽織紐帶留
▲吾妻コート　▲吳服切手

川越町鍛冶町

田 渡邊吉右衛門商店

吳服部

電話（二十六番）電信暗語（ヤマタ）
振替口座（二八七七）

拜啓　當季の商況は前文にも申上候通りの次第に付御仕入方法は務めて當分の間小細工的方針を執るの至當ならんと存候に付何卒度々御光來被下度又弊店も心付きたる点は飽迄御注意も可申候に付不相變御引立の程奉懇願候

營業品目

◎内外各國織物
◎毛織物
◎足袋地一切

川越町鍛冶町

渡邊吉右衛門商店

卸部

電話（二六二番）電信暗語（ヤヲ）
振替口座（二八七七）

前畧當部の販賣品は過半輸入品には御座候得共、斯の藥品、染料の如く戰爭の爲に暴騰せしものは更に無之、右は當業者と外商間との取引慣例は今秋の物は前年の暮より今年の春にかけて皆約定致し其品を本國にて織立てゝ今年の六七月中に皆横濱又は神戸に着津し夫を内地の約定主商人八月に引取り夫より全國中の我々洋服店に廻るものに候得者本年の歐洲の戰亂突發前に悉く入荷濟に相成少しも戰爭の影響は無之反つて一部内地品は下落致し居候に付昨年より安きものは有之候得共高き物は更に無之候間何卒御安神の上御用命被仰付度奉懇願候

營業課目

○洋服一式　◎吾妻コート　○マント
○インバネス　○外套　○東モジリ
○ズボン下　○ズボンツリ　○サルル股
○カラト　○カフス　○ホワイトシヤツ
○ネクタイ　○カフス釦　○手袋　靴下
○シヤツ　○シルクハハツト　○帽子各種

其他洋服に必用なる附屬品一切

尚々今春より特約製造致し居候靴類各種は益々發展致し今や堅牢と低廉との御評判の基に多大なる御用命相受け申居候尚一層奮勵吟味念入に製造致す可く候に付御注文の各位は御一報を賜り度然らば直ちに最新流行の「カタログ」及皮見本を持參致し可申候間御用命御待申上候

川越鍛冶町

田 渡邊吉右衛門商店

洋服部

電話(二六二番)
電報(ワヨ)
振替口座(二八七七)

拜啓當銀行部も御蔭を以て逐日發展を告げ候は偏に各位の御引立に依る事と奉感謝候尚將來金融上に付ては充分御便利に且つ取引手續等は可及的簡易に御取扱申上候間何卒御用の節は御遠慮なく御用向被仰付度當行は御承知の通り資本金五拾萬圓の株式會社とは云へ合名的組織に有之從つて當渡邊家は上下一同のもの全力を盡して熱心に從事可仕候間倍舊の御引立を賜り度奉懇願候

川越志義町

田 株式會社 川越渡邊銀行

電話川越(二)四一番)
振替口座(東京二九〇四六番)
電信暗號(ワキ)

營業項目

一 普通部

◎定期預金 (年利六分)

此預金は六ヶ月以上豫め期限を定めて御預り申ものに御座候然れども若し期限内に金員御入用を生じたる節は御相談の上相當の利子を付し御拂戻し可致候

◎當座預金　（百圓に付日歩金壹錢）

此預金は普通預り證書を發行するものに有之候へ共特に當座勘定の御契約被成候へば御引出に小切手御使用の便あれば商家又は金錢出納の頻繁なる方々には最も御便利の取引に御座候

◎特別當座預金　（百圓に付日歩金壹錢參厘）

此預金は通帳を以て出入致候方法にして一口金五圓以上何程にても御預り申上げ御入用の度毎に何時にても御隨意御引出の出來る預金に御座候

◎當座貸越金

當座預金御取引の方にて御預り金の外一時御用便可相成輕便の方法に有之候

◎諸貸金、並に手形割引

貸付金並に商業手形、擔保付手形等種々の方法有之候、金利の儀は精々低利にて御相談可仕候

◎送金爲替、荷爲替

目下の處左記各地に取引銀行有之候間上記送金爲替、荷爲替、並に代金取立等充分御便宜に御取扱申上候

但し當行と當座取引有之候方に限り東京横濱への送金は無手數料にて御取扱申候

二、貯蓄預金

▲貯蓄預金　（年利五分七厘）

此預金は金壹錢以上何程にても御預り致候、毎月五日迄の御預り金は其月より利子を付し其後の分へは翌月より利子を付け申候、三年以上一度も御引出のなき場合には特別の増利子を附加可致候

壹圓未滿の御預り金へも利子を付し申候、利子の儀は毎年五月十一月の兩度に計算の上元金へ組入れ申候

社寺學校或は多人數聯合の團体貯金に對しては利息の割合は勿論取扱方に付て特別御相談可仕候

▲掛込貯金

此預金は左表の掛金を月極め年極め等の方法にて御預り致し三年五年十年等の後は御約束の金額を拂戻すものにして知らずの内に老後の保養金を作り又修學費用の基金となり商工業家徒弟獨立の時の資本となり御結婚の場合の御仕度料と相成申候

掛込金一覽表

◎毎月掛込んで	壹年目に	百圓受取には	金八圓拾壹錢
同	參年目に	同	金貳圓五拾七錢
同	五年目に	同	金壹圓四拾七錢
同	七年目に	同	金九拾四錢
同	拾年目に	同	金六拾錢
◎參ヶ月毎に掛込んで	壹年目に	百圓受取には	金貳拾四圓貳拾貳錢
同	參年目に	同	金七圓六拾八錢
同	五年目に	同	金四圓參拾七錢
同	七年目に	同	金貳圓九拾貳錢
同	拾年目に	同	金壹圓九拾錢
◎六ヶ月毎に掛込んで	壹年目に	百圓受取には	金四拾八圓拾八錢
同	參年目に	同	金拾五圓貳拾七錢
同	五年目に	同	金八圓七拾壹錢
同	七年目に	同	金參圓八拾貳錢
同	拾年目に	同	金五圓九拾錢
◎壹ヶ年毎に掛込んで	壹年目に	百圓受取には	金九拾五圓拾八錢
同	參年目に	同	金參拾七圓拾七錢
同	五年目に	同	金拾壹圓貳拾錢
同	七年目に	同	金七拾壹圓六拾七錢
同	拾年目に	同	金五拾錢
◎壹時に拂込んで置いて	壹年目に	百圓受取には	金貳拾參錢
同	參年目に	同	金七拾六圓貳拾八錢
同	五年目に	同	金八拾八圓拾貳錢

同　七年目に
同　拾年目に

金七拾圓七拾七錢
金六拾壹圓參錢

以上貯蓄部預り金に對しては拂戻しの保證として公債證書を政府に供託致し置き候

右の外銀行一般の業務は精々確實に營業致し居候間御遠慮くなく何なりとも御用命被仰付度候

◎爲替取組先

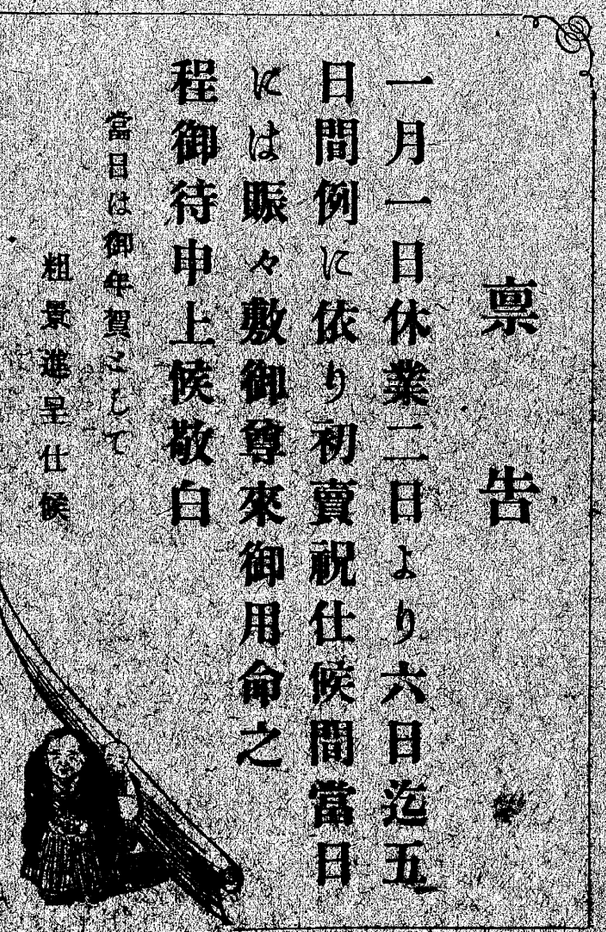
東京	合名會社	中井銀行	桑名
仝	株式會社	十五銀行日本橋支店	仝
仝		仝第百銀行	仝行桑名支店
仝	合資會社	川崎銀行	横濱
仝	株式會社	第十銀行東京支店	一ノ宮
仝	合名會社	河合銀行	仝
京都	株式會社	第百銀行京都支店	仝行一ノ宮支店
大坂	仝	仝行大坂支店	甲府
名古屋	仝	名古屋銀行	仝
豊橋	仝	仝行豊橋支店	第十銀行
田原	仝	田原商工銀行	仝
大垣	仝	共榮銀行	仝
濱松	仝	西遠銀行	仝
静岡	株式會社	静岡銀行	仝
長岡	仝	長岡銀行	仝
前橋	仝	上毛物産銀行	仝
高崎	仝	高崎銀行	仝
伊勢崎	仝	伊勢崎銀行	仝
境	仝	伊勢崎銀行境支店	仝
澁川	仝	澁川銀行	仝
富岡	仝	富岡銀行	仝
長野	仝	信濃銀行	仝
松本	仝	仝行松本支店	仝
上諏訪	仝	仝行上諏訪支店	仝
伊那	仝	仝行伊那支店	仝
屋代	仝	仝行屋代支店	仝
佐野	仝	佐野銀行	仝
栃木	仝	栃木銀行	仝
古河	仝	第百廿銀行	仝
鹿沼	仝	鹿沼銀行	仝
今市	仝	仝行今市支店	仝
水戸	合資會社	川崎銀行水戸支店	仝
千葉	仝	仝行千葉支店	仝
佐倉	仝	仝行佐倉支店	仝
青梅	株式會社	青梅銀行	仝
五日市	仝	五日市銀行	仝
八王子	仝	仝行八王子支店	仝
赤羽	仝	鹿沼銀行赤羽支店	仝
浦和	合名會社	中井銀行浦和支店	仝
行田	仝	仝忍支店	仝
岩槻	仝	仝岩槻支店	仝
杉戸	仝	仝杉戸支店	仝
粕壁	仝	仝粕壁支店	仝
川口	仝	仝川口支店	仝

左右両頁露光量調整、重複撮影

稟告

一月一日休業二日より六日迄五日間例に依り初賣祝仕候間當日には賑々敷御尊來御用命之程御待申上候敬白

富日は御年賀として粗景進呈仕候



行田	株式會社	忍商業銀行	
鴻ノ巣	仝	仝行鴻ノ巣支店	
所澤	仝	所澤銀行	
熊谷	仝	熊谷銀行	
飯能	仝	飯能銀行	
秩父大宮	仝	秩父銀行	
本庄	仝	本庄商業銀行	
深谷	仝	深谷銀行	
豊岡	仝	黒須銀行	
小川	仝	比企銀行	
鴻ノ巣	合資會社	鴻ノ巣銀行	
秩父下吉田	株式會社	武毛銀行	
越羽生	仝	越羽生銀行	

左右両頁露光量調整、重複撮影

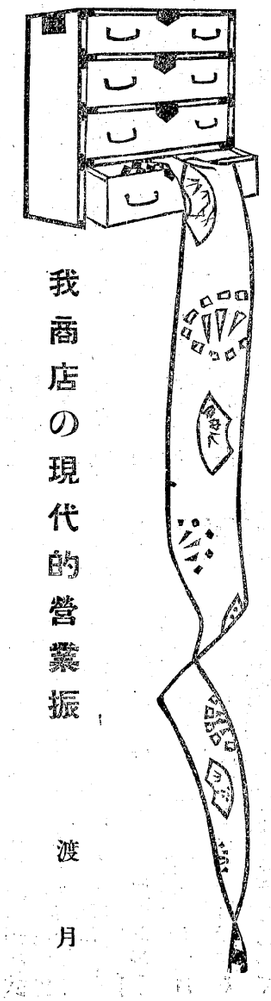
告

一月一日休業二日より六日迄五日間例に依り初賣祝仕候間當日には賑々敷御尊來御用命之程御待申上候敬白

當日は御年賀として粗景進呈仕候

行田	株式會社	忍商業銀行	深谷
鴻ノ巣	仝	仝行鴻ノ巣支店	豊岡
所澤	仝	所澤銀行	小川
熊谷	仝	熊谷銀行	鴻ノ巣
飯能	仝	飯能銀行	秩父下吉田
秩父大宮	仝	秩父銀行	越生
本庄	仝	本庄商業銀行	

深谷	仝	深谷銀行	
豊岡	仝	黒須銀行	
小川	仝	比企銀行	
鴻ノ巣	合資會社	鴻ノ巣銀行	
秩父下吉田	株式會社	武毛銀行	
越生	仝	越生銀行	



我商店の現代的營業振

渡　月

現代の事業には現代の營業方針を要するが如く、現代の商店には現代の營業振りを必要とするは今更言を俟たぬ次第である、されど單に現代の營業振りと稱するもの、果して如何なる營業振りが現代式であるかは大に研究せねばならぬのである然して又土地の人情風俗習慣と云ふものと調和を欠かぬ樣にせねばならぬ、假令ば東京の如き、大坂の如きは現代的方法を極めて發展して行ふを要し、川越の如きは都鄙の中庸を保つ加減になさゞる可からず、又都を遠く離れた土地は其土地の習慣を主眼として現代の營業振りを調和すと云ふ位のものにして適當ならん乎、然し之が現代的式であると、自ら稱しつゝも而かも尙ほ舊樣を株守し昔時の習慣に倣ひつゝあるものも尠くない、なれど時勢の進歩は駸々乎として一日片時も休止するものではない、從つて間斷なき改善と進取とを專一に心懸けざれば忽ちまちにして實業界の伍落者となるであらう、我が渡邊商店は夙に玆に顧る處あつて、時代の趨勢に鑑み間斷なき改善と進取とを唯一の目標とし川越地方の風俗習慣に法つて現

代的營業振りを實現しつゝあるは自ら信ずる處である

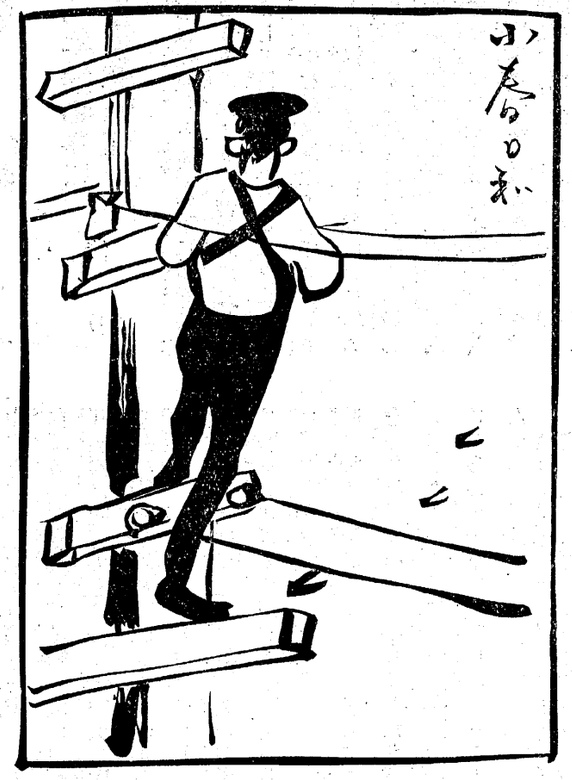
現代の社會は激甚なる發達と急忙なる進歩とに應ずる營業振りならざるべからず、時間を尊ぶ爲には迅速と簡便を必要とす文明人士は時間を空費するものでない、一分一秒にても徒らに之を送了するものでない、なれば現代式の營業振りとしては大小となく總て簡易を旨とし迅速に取扱わねばならぬ

信用は文明人士の尊ぶもので、殊に商店にては信用を守り本尊とし居る、萬般の事一切信用に依つて成立する、我渡邊商店は勉めて信用を尊ぶ、自己の信用を重すると共に他の信用をも重んずる、自己の信用を博せんと欲せば須らく他の信用を重んせねばならぬ、他の信用を重んじ自己の信用を重んじ而して初て充分の擴張を計り思ふ丈けの取引を爲し得るのである

誠實は渡邊商店の信條である、誠心誠意は何事にも必要なれども殊に商業には最も必要である、誠心誠意は營業の基礎である、舊時は嘘言も方便と云ひ騙引は商業の常手段などゝ稱して居たが、今日の時代にては決して襲用すべきではない、正直は最良の商略なりとは現代の營業振りを言現はしたものである、渡邊商店は徹頭徹尾、誠心誠意を以て顧客に對するので其間斷じて騙引とか方便とかを容れないのである

渡邊商店は質朴を旨とする、今日の如き時代に於て質朴を旨とすると云へば或は現代式に反するかの如く思惟さるゝならんも實は決して然らず、質朴とは眞面目にして輕浮ならんことを言ひ現はしたもので、如何に世が滔々として澆季に向ふとは云へど商店としては飽く迄も質實にして輕浮なる行爲を排斥する輕薄浮誇は渡邊商店の絶對に嫌ふ所であつて

決して現代の營業振りに非らざるべしと信ずる、且つ夫れ現代の營業振りとして最も進歩したる通信販賣の機關を活用するの一方法として最も早數年以前より「此營業の栞を」定期に發刊し以て地方及び遠くは滿州、朝鮮、樺太、台灣、等よりの御取引の便に供し追年此新領土に販路擴大しつゝあり



要するに現代の趨勢に顧みて正確、迅速、簡易を以つて熱心着實に業務を取扱ひ勉めて日進文明の氣運に遲れざらんことを期すのが乃ち渡邊商店の營業振であります

戰局の吾織物界に及ぼす影響如何

渡月

我帝國政府は愼重なる審議の下に東洋の平和を保たんとする誠意より、獨逸政府に對し友誼的勸告として最後の通牒なるものを發し、八月二十三日正午を最終期限として回答を求めたり、然るに横暴なる獨國は終に之に答ふる事なく、日獨國交は遺憾ながら茲に斷絶して、畏くも我　天皇陛下の戰宣の詔勅を拜し、日獨両國は愈々干戈を交ふるの場合に至れり、初め去月末、墺洪國の塞爾維と戰を開くや、世間竊に其戰局の擴大することなきやを憂ふるもの多かりしが、忽ちにして露西亞は塞爾維を助くるの名の下に大軍を國際上の永久中立國たる「ルクセンブルグ」及び白耳義に進め今哉大擧獨國首府伯林を蹂躙せんとして進擊中なり、獨國は又佛國を一擧に屠らんとして白耳義國を蹂躙して佛國々境に迫れり故に白耳義國は起ちて之に當り佛國又擧國皆兵主義を以て國防に務め英國又之に參加して一大聯合軍となりて獨國を追討しつゝあり、而して我日本帝國は今乃ち日英同盟の關係上、獨逸と戰を開かざる可からざるに至る八月二十四日、墺洪國政府が最後通牒を塞爾維に致すの時に於て、世間兩國間の事すら、平和の交渉を以て結了すべきものとなしたり。誰か復たこれより延ひて歐羅巴及亞細亞の全體に渉るところの大戰爭を、今日に見ることを逆睹せんや

戰爭の利害得失に付ては種々の議論あらんも、要之に、戰爭なるものは初め、血と金力の多大の犧牲を要求し結果屍山血河の慘劇を

敢てするに至るものにして、實に國力の減耗と人命の損傷等を招く尠少ならざるに於ては、一面國家の大破壞者であるが、飜つて他の一面を觀察すれば、國家は其戰爭に依りて版圖の擴張、文物の進運、商工業の勃興等を招致する、所謂大建設者である。特に後進國が一躍して先進國を凌駕せんとするには戰爭は唯一の機會である、手段である、今是等利害得失の点より這般の戰爭を觀察するに余輩は寧ろ利益の方に解釋するのである、即之れを政治上より論ずれば吾國は既に一等國の範に入れど、由來東洋方面而已に於て强國であつて殆んど世界の外交舞臺、政治舞臺には沒交渉と云ふ可き程でありしが、今回の戰爭が吾强國なる事を世界に紹介する動機となりしは寧ろ喜ぶ可き現象である

然り而して過去數年來不景氣に馴れし惰氣慢々たる、我財界は此戰亂に依り一大刺擊を受けて心機一轉の好機運に至らんと思ふのである蓋し不景氣の聲は、獨り吾國のみならずして歐米諸國に於ても數年來同じく此不景氣病に惱みつゝありし際なりしかば今回は所謂此戰爭なる一大外科的手術に依つて、長く懸案たりし病根は絶滅せらるゝに至る可しと信ずるのである

以上述ぶる處は戰爭の一般的結果であるが今我織物業界に對して如何なる影響を及ぼすかと云ふに、今日迄表れたる直接の影響は、原料たる絹、綿糸の大暴落に加へて、狼狽的悲觀的程度の荒しかりし爲めと又先年來より融通機關の嚴重とに依り、開東機業地の生産及び取引狀態は一時停止と云ふ有樣にて、市場は全く暗憺たる光景なりしが、爾來戰局の如何に拘はらず、糸價の一進一退にして敢て變らざるも時期の推移に伴ひ市場は余程殷賑を來し漸く取引の瀕繁を加ふるに至れり

然り我内地向織物は全く内地の需用供給如何に依つて市價の左右さるゝものにして、對外貿易の盛衰には敢て關係薄きものゝ如し、果して然らば今内地生産の實況如何と云ふに夏物の不況を受けたる機業地は原料糸相場の急變と戰局の前途不安の爲に殆んど生産を停止し且現在の織溜品は市價維持の爲め、各自連合して相場の恢復するまで持久せんとする非賣的同盟を結べるものもありと、加之金融業者は原料商等と相提携して市價の維持策を講じ生産を制限しつゝあり、然らば必ず例年より産出は減少せらるべし、然して需用者側の態度如何と云ふに縱令日清日露の二大戰役の如く其規模大ならずと雖も、戰爭は物資の異動を促がし、勢力の自由を惹起するものなれば其結果一般社會に刺擊を與ふることは明なることなれば、寧ろ多少景氣の挽回を見るべきと信ずるを以て此際は徒に消極的方針を止めて進んで相當の準備に着手せられん事を勸告するものにして、需用眞盛期に入り突發的に買入に着手し却つて生産者をして實際の市況を誤解せしめ、需給の關係を紊乱せしめざらん事を切に望む處なり、故に當業者は漸次買進み以て仕入の好機を逸せざらんことを、而して又一方産生家に於ては一層其態度の愼重ならんことを望み、敢て時局の如何に悲觀せず互に相牽連して斯業界の安固ならんことを希望して已まざるもの也

世界を通じたる男女の習慣と昔時の結婚

渡月

之れは世界古代からの結婚の如何に變化し蹟を根據としたものですから左樣御承知を願ひ升

△男の仕事と女の仕事　世界古代からの婚姻

たるかを具体的順序を追ふて掲ぐるものにして一般からの觀察ではあるが多くは外國の事の變遷を記すに先ちて茲に掲げ度いのは男女の分業である、古代原始時代には何事も茫漠

として「ハッキリ」と區別が立つて居ない、勿論分業など、云ふ事は無つたが唯男女の分業だけは此時代から行れて居た、濠州の未開地方では今日でも魚を捕獲してそれを殺す迄が男の仕事で、夫から跡は皆な女の仕事となつて居る、亞米利加の土人は男が獵をして何か獲物があると、女は之を自宅へ運ぶのが役目である、「エスキモー人」は海豹を捕獲してそれを海岸迄運んで來る、それ迄が男の仕事で後を女のする仕事となつて居る、又原始時代の民族は荷物の運搬は女のする仕事となつて居る、亞米利加の「ゲマラ」と云ふ種族は男は弓矢其他の武器を取纏めてさつさと引越して仕舞ひ女は後で其他の荷物を凡べて運ぶのが役目である、南米伯列西爾にも之と同じ風俗がある、此等は原始時代の民族の風習であるが追々と社會が進んで男女の分業が漸次に變つて來た、男の仕事を女がしたり、女がする仕事を男がする樣になつた、料理などは女のする仕事と普通定つて居るが或る地方では男が料理する處もある、商品の賣買は普通男のする仕事であるが瓜哇邊では專ら女が商賣して男は唯家に居ると云ふ例外もある、又南米秘露でも紡織等の女の仕事が男の仕事と爲つて居る、亞弗利加の「アビシニヤ」地方では男は市場へ物を買に行く事が出來ぬ、又水を汲んだりパンを燒たりする事も出來た併し一家中の洗濯は男の仕事と定つて居る、亞剌比亞では針仕事は男の爲すべき仕事となつて居る、之等は何れも例外の事であるが大体にては原始時代及之れに續いた時代には狩獵や戰爭は乃ち男の仕事で其他は總て女の仕事となつて居る、夫はつまり男は女より强健であるから男のする樣な事は女では出來ぬ其代り女は男よりも細微な点に氣が付くと云ふ特性から斯くは仕事が分たれたのである此仕事の相違が

婚姻に對して大に關係があるのは否定することの出來ない事實であらうと思ふ

△男と女との地位　昔時は女天下であつたが漸次に男天下と爲つて來たとの說がある、又女尊男卑の國もあれば、男尊女卑の國もある、南洋の國では男の種族が分れて居て其女王の勢力が甚だ强い、王の下には女の酋長が澤山に居てそれが相寄つて女子間の秩序を保つべく監督して居る、之れが女天下の一例である、又「スマトラ」の一島では女が大に威張つて居て男子の尊敬を受けつゝある、之れは此島では女が少いからである、此處では男が結婚を申込むとき女が忌と思へば斷然拒絕する權利を以つて居る、之等は原始時代の民族には例外である、其外濠州の一地方や又た「マダカスガル」地方亞弗利加の「タホメ」では女の酋長が大なる勢力を有して居るのみか有力なる女軍を持つて居る、斯かる女天下の實例もあるが而かも之等は女の數が少ないとか又は種々なる特別な理由に基くので一般に適用するは出來ぬ、一般を通じては矢張り男は尊い女は卑い位置にあるのである

然して結婚は如何にやと云ふに一夫一婦、一夫多妻等種々なる風習があるが、原始時代に於ける著しい例は所謂

△掠奪結婚　である之れは原始時代各所に行はれた風俗であつて媒介人なしに腕力武力に訴へて他の種族から自分の氣に入つた女を引浚つて來るのである、其二三の例を擧ぐると自分の妻にしたいと思ふ女を掠奪して自宅に隱して置く、左樣すると盜まれた方の種族では娘の監督者たるもの（父とか前夫とか許婚者とか）が多勢の人數を連れて掠奪者の處へ押し掛けて來る、此方でも豫め防備を整にて應戰するの心得で、戰爭の眞似事が起る、種々の競技をするとか鬪鷄を行ふとかして勝敗

を決するが此場合には掠奪者が必ず勝つのであるが、此等は必ず勝つ樣に初めから約束されてあるのだ、されど此擬戰以前の狀態を推考すると實際に戰爭をしたものらしい、斯かる場合に於ては女の人格は全く認められず、泥棒が恰も其處らの物品を盜んで來たのと同じ有樣に置れてる、此掠奪結婚は文化の進歩と共に減少し夫と共に

△賣買結婚　が行はれて來たのである、之は其字が示す如く金を出すとか品物を出すとかして女を買つて來るので、牛を遣るから女を呉れぬかと云ふやうな交渉が行はれるのである、亞弗利加南方の「カフイヤ」と云ふ種族では牛を以て女を買ふのは例と爲つて居て、女の容貌や又は父の地置等に依つて自ら相場が違ふ最低牛六頭、最高三十頭と云ふことになつて居る、同地方の「ホッテントット」種族では女の値打が大に下つて牛一頭に迄になつて居るさうだ、斯かる賣買結婚は希臘の昔から行はれて居たもので「アリストーリル」の著書にも又「ホーマー」の「イリエット」にも其事が見えて居る、希臘計りではない其風習は世界各所に於て行はれて居たものらしい、日本及び支那では其形跡が見えぬ樣であるが一般に行はれる說に依ると、世界の結婚の風習たる結納は此の賣買結婚の餘習であると云へば、我國や支那でも或は遠き過去に於ては此の結婚が行はれたのではないかと思はれる

拂込貯金について御披露申上ます

孤月

兼々皆樣より御勸めを受けて居りました、掛込貯金（所謂三年貯金）を先般より當渡邊銀行で實施する事に致しました、御承知の通り此の貯金は三年五年十年と豫め年限を定め一定の金子を月極め又は年極め等にて御拂込に成りまして滿期日に至り豫定の金額を一時に受取る方法で御座います、而して此貯金の目的とする處は老後の保養料ともなり、又は子

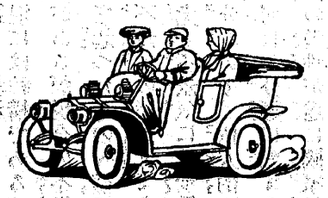
弟女兒の修學又は嫁娶の資金ともなり或は商工業家の子弟にありては其獨立に際し各々其業の元金となる等、知らず識らずの間に大金を貯ふる事が出來る便利な方法で御座います、其れに又普通の貯金と違ひまして、掛金の年限が終らねば、決して引き出す事が出來ない仕組でありますから、一時の都合や何かで、折角積み始めた掛金を中途で怠る憂もなく若し怠たれば種々の不利益になりますから、勢い滿期まで掛け續ける事になる、そこで養老の實を擧げ、商工業の資金を作り、修學の目的を達し又は御結婚の場合の御仕度料ともなりて、其の目的にかなう次第であります

一体此の貯金は、日露戰爭前の頃迄は、其名も起らず預金界に於ては特に月掛預金として注目するに足る事實がなかつたそうであります、處が明治三十三年に設立した、不動貯金銀行が三年貯金なる仕組で提供して勸誘奬勵に努力したる結果、四十年頃より著しく世間の注目を惹き初めました、處が其以來猫銀行も、均子銀行も、月掛貯金でなければ夜が明けぬ！、事實世帶が持てぬ！、と云ふ樣な事になり、三年貯金を中心にして、各種の月掛貯金が考案せられ、津々浦々までも月掛貯金の聲が響き亘る、現狀を見るに至つたので御座います、此の如き仕組の預金は、歐米諸國には其例を見ざる處で如何にも變挺なものでありまして、銀行界の黑人節間では、種々な問題が持ち上つて居るとか云ひます、然し退いて考へれば、國民の貯蓄思想著しく低位に居る吾國に有りては、苟も貯蓄思想を涵養し貯金額が增加し、一面には國民の品位を高め、一面には經濟社會に資本の充實を圖る事は、あらゆる部面の協力一致すべき所で殊に直接國民の貯金を預る事を任務とする銀行が、國民の趣味に投ずる强制貯金の方法を提供し、一は未貯金

者より貯金開始の決心を誘導し、一は貯金者を貯金中絶の邪路より救ふ事は、銀行當然の職分であると云はねばなりますまい。

以上は或る新聞紙に掲載してありました三年貯金に對する批評の一部で御座いますが、案ずるに、毎月或ば年に一回若くは二回三回と、一定額の貯金を預け入るゝ事を、若十年間繼續して、其間は之を引出さず、最後まで增殖するといふ事は、興味ある方法ではありませんか、以上の主旨に基いて先般掛込貯金と云ふ名稱を付して皆樣に御勸め申上る次第で御座います、然して此掛込貯金の掛込んでゆく割合は本誌中に掲載してあり升から御參照下さいまし。石の上にも三年の譬、日々の無駄な費用を儉約してお蓄へにならば、塵も積つて山となり、不時の災難に遭つても、轉ばぬ先の杖で、豫め用心が肝要で御座います吉凶共に要するものは何れも、皆金で御座います。

嗚呼人間萬事金の世の中！



小僧の見た戰爭と景氣

渡　月

歐洲に大戰亂があると云ふので我帝國の睾丸の少さい商業家が大驚愕をなし、是迄も可なり悲慘なる我商業界は又々念入りの上塗の不幸に遇ひ、實に今年の織物界などは其極であらうと思ふ

歐洲に戰亂があつたからと云ふて又日本が日英同盟の規約に依つて少しばかり膠州灣へ出兵したからと云ふて、少しもビク〳〵する處はない、戰爭は無論袋の鼠より尙譯はない鍋の中の鱠の位のもので只同胞の何人か〻犧性になるのがお氣の毒だが、是れも國の爲めと思へば名譽なものである、又人殺の練習も國家保護の上から見ても遇には結構である、元來不況にも種々な原因があるが現今の不況は皆各自の心掛けに依つて起つたもの〻樣に思はれる、然らば各自が不景氣の製造元であつて又販賣者でもある、尤も不景氣には世界的あり、國家的あり、區分的あり、個人的あり、然して此頃の不況は何れの分類に屬するかと云ふと最後の個人的の漫性が遂に國家的となつたのである、大隅首相は大命を奉じて內閣を組織し以來國家に一大刷新を計るの最先法として人民の奢侈をため輸入防遏の手段として物價の引下げを計畫したるものにして敢て不思議でも何んでもない、不況の爲に物價が下落したと思ふのは大間違へである

他の商業はいざ知らず我織物界不況の狀態などは、是迄實に空中樓閣に均しき仕事が重に行なはれて、居て完全なる築造法に叶つたものがない咎めである、之れを小かに云ふと憎

まれ小僧になるから迹は申しませんが、今日より追々地行をなしたならば恰度世界的平和の際迄には立派なる基礎の上に取引方法を設けられ戰後の華況と相俟つて實力ある大盛況を現出するのは火を見るより明な事であろう、故に小僧などは樂觀の一天張りで此戰後に於ける我帝國の國威の宣揚と大勢の進化に伴れて益々躍進するの大覺悟を有して居るのである

△昔し江戸に火事があると迹は屹度景氣が直ると云ふ事だつけが、是は尤もな事である、川越なども廿六年の大火後長足の發展をなした事は小僧の駄くる迄もなく著しきものである

今も昔も同じ事で、大戰乱の後には必ず意外なる景氣が出るものである三十七八年の日露戰役の後などは全く素適な勢力で景氣が出て來たのである、然しながら其景氣に花も實もあるのであるが日本人が未知の此花は實を結ぶ迄俟つ事が出來なくつて互に無闇にむしり取りつこして了つたのだ、夫故に花も滿足に取れずにちり〳〵ばら〳〵にしてあつたから節角取つた花は遂に暫時の目を樂しませる迄にもいかずに反つて、非常なる困憊に陷つたものが多かつたのである、然るに今度の戰爭は日露戰爭に幾倍大きいかは目下の戰線延長八百哩から推しても判るが實に世界を擧げての大戰爭をして居るのであるから、平和回復の後には如何なる大景氣の花が咲くか、又大きな實を結ぶかは實に想像が付かぬ位である、試に此大戰爭に幾何の金が費ゐるかと專問家に聞いて見たら概算一日に七千萬圓乃至九千萬圓位は人用であらうとの事である、然らば假に六ヶ月を經續するとすれば百六十二億圓と云ふ小僧などには計算の付かぬ程の巨額の金がかゝるのである、そして此莫大なる金は

何れに消費せらるゝのであらう別段天に騰つて雨となるのでもなく、又地に這入つて土に化すのでもなく即ち此大金は世界中に撒布せらるゝのである、そうなつた曉には物價の騰氣は迚も抑へ切れるものではない、又戰爭に參加して居る何千萬人と云ふ人々が殘らず人殺し屋に營業が變つて居るのだから農商工共にそれだけの人の仕事は絶對に休止せられて居つて、食ふ事丈けは反つて余分に入用になれば迚も一日も休止しないのである、假に此戰爭が一增永引いて一ケ年も續くと白國、獨國、佛國の如き擧國戰巷にある國の壯丁は皆從軍して居るから畑は草だらけ、工場は戸閉め、牧場は女監視に依つて微に生物の保護をすると云ふような闇黑なる天地と化したのであるから之れが平和回復の後には米麥類も吃度騰氣する道理である、加之戰捷國では國中熱狂してお祭り騒ぎをして錢を使ひ又凱旋軍人は破格なる恩賞に預つて贅澤をする、又戰敗國では復舊工事に汲々として大金を使ふと云ふ事になるのは數の免れざる事であらうと思ふ、然らば他は何れでも御勝手になすとも我日本國は此際は擧國一致して世界的の商戰に參加するの大發展をなすの好機であるから此機を逸せず戰勝國へ生絲、陶器、木材、セメント其他何品に據らず復舊工事の材料やら贅澤品やらをどし〳〵賣込むのは實に日本商人の一大責務である、又此機は日本の經濟狀体に一大變化を及ぼす最良の好機である、左樣なると生絲も二千圓、セメントも十圓、綿糸も百五十圓と云ふ大相場が出るであらうと思ふ、此時には又我商工業界の利益は莫大なるもので、今年は三億圓來年は五億圓と云ふ輸出超過となり其程度は前代未聞東株一千圓、石油株の五百圓、東京大坂の地價は一坪何千圓、川越でも何百圓となるのは決して夢

想では無いと思ふ願くば此説を實現の時を得たいと思ふ

大國民の襟度

獨逸が最後の通牒をせぬ爲遂に膠州灣頭砲聲殷々として驚天動地の一大活劇を演ずるの不幸に遭遇した、今哉我忠勇なる同胞は海に野に戰つて違算なく大捷の内に最早青島の要塞際に押詰めたが、此迄は誠に赤子の手を捻る樣なものであつたが之からは迚も是迄の例には行くまい、我軍は益々不利益の戰爭になる

と同時に先方では有利なる位置に據るのであるから少しく手間が取れよう、然しながら前にも言つた通り鍋の中の鱠で當分ぢたばたく〳〵する計りであるから心配はないが、此時に當り我々商人實業家が余り苦勞して大國民の襟度を落し自重とか警戒とか氣弱い消極的の方針を執りて一勝一敗に睾玉が上つたり下つたり逡巡躊躇して縮み込んで仕舞ようては若し戰局が永引と殆んど腰拔けになるであらうと思ふ、此場合には今は世界大戰爭であると、最も大膽に泰然自若として大勢を洞觀し機を逸せず利を拾ひ飽迄進取的に奮鬪の大覺悟が無ければならぬのである、今日は我帝國の舞臺も雄大なものに成つたから實業家が勇氣百倍して活躍の好機は實に是からである、

何んと面白い事では無いか吾織物業者も飽迄積極主義の下に奮進に細心注意堂々として奇利を博し得ねばならぬのである即ち膽は大にして心は小なるを要するのであるが何れ大國民の襟度は平素心掛ねばならぬ事である

流行

渡月

今秋は流行の變遷としては別に著しき推移の記すべきものはない、されど流行は滔々として長へに流るゝ水の如く瞬間も止む時の無いものである、假令變化は少ないとしても大正三年は、三年式としてそれ〴〵の趣味と嗜好の美を發揮せずには止まぬのである、我國の典雅なる古代美は益々面白く新意匠を加味せられ、世界的の色彩と絢爛なる調和を得て婉麗花の如き「ハイカラ」趣味包擁描出せられ愈以て蕉境に入りつゝあるのである、流行界今秋より冬にかけての變化の傾向を左に記して弊店販賣品の偶々時流に先せるの用意を御紹介せんとするのである、

△島物は絹綿によらず未だ棒式の時代にして、其色合の配合によりて更に三年度式と呼ばしむるの趣味を保たせる迄にして其色合は概して今秋よりは茶は尊ぶようになりぬ、尤も其茶色にしてもけば〳〵しきものは絶對にすたれ極めて濃と云ふ譯でもなき澁味を帶びた高尚なる茶を撰み、夫に濃厚なる鼠などを配し

て織なせるものが宜ろし茶の色の中に枯葉色に枯艸色などゝ云ふ茶も流行出せり

△模様としては在來のものは其儘にして、變つたものは埃及式が寫生樣を加味したる「ムックリ」として圖案となりて巧妙に應用せられたるものが最も新柄として歡迎されるのである、此埃及式は今秋に至り漸く應用の精華を發揮せられた樣になつた、最も小物になりては、衣服調和の上から見て色目も模樣も種々にして、派手向には紺青色、褪紅色、洗朱、新搗色〔紺青の濃きもの〕の新色あり柄も、埃及式、更紗式、藤原式等の妙致を極めたる鮮麗なるもの尤もよし

△友仙物は縮緬、羽二重に拘はらず大正三年式とも云べき新意匠はやはり前述の如き好みなるが其多少變化の点を擧ぐれば、是迄流行の「キユービスト」式も稍々變し是迄の鋭角なりし三角式は鈍角となりて面白き諸種の圖案が描出せらる、外に「セ、ツション」式其他は埃及式更紗式等今秋の原流として千態萬樣に畫かれて最も趣味豐富なるものを好む

△帶地は古典御所模樣の如きは今秋は別に優勢ならず、是又更紗式に新意匠の消化せられたるの多く不相變唐織、錦美織、御幸織流行界の寵兒として縱横濶歩の概ある如し

英國流行の二大源泉

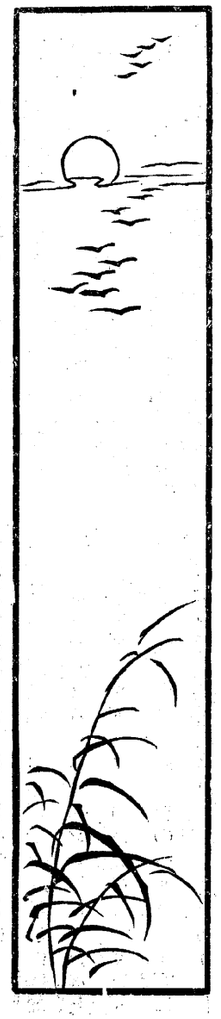
婦人の服裝などの流行は其源泉は大凡誰にも解りますけれども男子の服裝に關しては如何なる所から流行して來るか其は一寸人の注目を引かぬ樣に流行してきて其結果人が種々評判を始めますが夫では眞の流行は窺はれません、夫れに我國では未だ流行を生む程の勢力の有る大きな社交團と云ふ樣なものは有りませんから一寸眞の流行を認めることが出來ませんが世界に於ける男裝會の源泉とも稱する英國には其流行を最も明白に知ることの出來る二つの大社交團があるのであります

其一つは陸上の大觀覽物で其一つは河上の大

競漕會であります其陸上の觀覽物とは競馬會で英國には五指を屈するに足る程の競馬會が有て何れも勢大なもので有まず、帽子や「ネクタイ」に「ダビー」と云ふ名稱の物がありますが之等は競馬會の名を取たものであります、又アスコットと云ふ言葉が能く見うけられますが此の「アスコット」は英國競馬會中の第一なるもので目下人氣を集中した純英國式のもので上流社會の英國質氣は悉くこの一會に於て表明されてをるといつても不可はありません、從て男裝の流行もこの一會に因て集中されてをる次第であります、この「アスコット」の競馬會の會場は英國「バークシアー」の西北二哩の「ウヰニグル」の南西六哩の地點に行はれる「ジョージ二世陛下」の「第三の皇子「カンバランド公が千七百十一年に創立せられまして爾來年々六月に開會せられてをりました、後千九百二年に英帝陛下の直轄となつて會場も變ぜられて頗ぶる盛大を極めてをります、特に其競走場にて流行を知るとのできますのは「アスコット」の競馬場に出席する者は服裝が非常に嚴重で有て天氣の如何に拘はらず體服を着用しなければならない規定の爲で有ります、而て英國の六月の氣候は最も變り易い時で往々雨と爲ることがあります、然かも服裝は禮服で無くてはなりませんから、堅い胸の「シャツ」がへと〳〵に爲らうが、高い絹帽が、雨に濡れやうが、決して、そんな事に頓着は出來ません、雨に逢ても、差支の無い帽子や、防水の雨衣等は斷じて許しません、是れが、英人の特質を現らはした點で春は想像した流行の當り外れは一擧にして分明致します、本年の「アスコット」は英國陛下の皇甥に當れる「丁抹王」の崩御の爲め一段の盛況を呈しました、左れば會に臨みました人々の服裝は黑の「モーニングコート」に暗色のズボンで

あつて、英帝陛下は濃い鼠の上衣で無くして緣取りの黑裝に折襟に濃い鼠の「ネクタイ」を掛けさせられ胸には「和蘭石竹」と思はるゝ白花を指されて白い甲掛を召されてをりました、實に當日の「モーニング」の地質は極く薄手の黑羅紗にて調和は取れねど細い絹「リボン」の緣取りとなし「チョッキ」は上衣と同じ地質襟開きは格外に廣からず、絹の高帽の鍔は廣き方にて山は極僅か恰好を取つたものにて鉢卷の「リボン」の代りに長い羅紗を卷いたものを正しと致してをります接客の服裝は「アスコット」に於て其流行を知ることを得ると同時に戸外服は「ヘンレー」と稱する大競漕會に於て認むるとができます「ヘンレー」の會の服裝は極く落付いた多く鼠地の薄地の柄物「チョッキ」は方前の衿あきの大きな型で上衣と同じ地質茶革の尖飾の靴、「ズボン」の裾は上に捲り上げます「ボート」の倶樂部の制服は無論水と能く調和したもので「ジャケツ」も「ズボン」も同じ縞の「フランネル」を良しとしてあります此の場合には誰とてチョッキを着る者は無い「スキック」艇や「バッフ船」やボートには爪先飾りの白鹿革の靴の赤護謨底を打つたものを正しとします更に其通なるものに至つては同じ護謨の厚さの「ヘム」を底に打ちます是れ輕くして涼し氣であるからであります、大學校の競漕倶樂部員は「ヘンレー」……に出づる時は白のズボンに所謂大學色の！上衣を着けます即ち藍色のフランネルで有て表の胞ポケットに紋章を附せ帽子は麥稈で鉢卷には倶樂部のリボンを飾れるからでヘンレなるこの水上の遊もアスコットニ劣らぬ盛大なものであります英國陛下のこの時は白のヘルメット帽に黑ズボンで臨御遊ばされた事は度々ありました、之を要するに英國には陸にアスコットが有て禮裝の流行を示し水上にはヘンレーが有

て戸外の流行を現はします此二つは英國の流行の産み出す二大源泉であります



此の秋と冬への新流行

洋服界の流行は英國式

最近英國式スタイルが歡迎せられつゝありますが其洋服生地にはあまり格別の變化がありませんが其スタイルには多少の變化があります先づ「フロックコート」の本年の最流行は少々毛立てるメンルト地が歡ばれます又「フロックのズボンは縞目は餘り瞭然しません稍々黒味の帶びた極めて質素なものが流行してをります、其形狀と申しますと襟は其折返り少々巾廣く其代り襟は長く釦と引き詰めて四つ釦にて二つがけが最新なるものであります、次に「モーニングコート」の容姿は上着は前年に比べて胴裾共に締り氣味となり地質は同樣に毛深きものが流行であります其ヅボンには「フロック」に比らべて縞柄の荒らきものが歡迎せられ又「スコッチ」の三つ揃ひ等は青年間の流行であり升、其色合は茶に少々緑の加われるもの緑地に藍色の加はれるものが好ます昨年に比べて脊廣服は上着の丈け心持ち長くズボンは股より上が太き型であります其

地色は銀行會社員向きには紺地黒地多く散歩用又は旅行服としては「スコッチ」又は毛深きもの流行せり、片前脊廣は昨年に比して襟稍々長く總體に上着の外に衣嚢を附けず前裾を切り取らず、裾つまり殿寛かなるように仕立て、冬物にてはズボンと裾を折り返すことを絶對に致しません、外套の流行はと申しますと[縞絽][縞スコッチ][駱駝メルトン]類、子供物マントは縞スコッチ[縞絽][縞サージ]等であります[オーバコート]の形型は昨年に比し

幾分丈け長く襟明きは大きく襟巾は廣く比翼附きのポケット、釦は一行釦にして衿にはをもに天鵞絨を附けます地質は鼠相降のメルトン類であります、道中着の「オーバーコート」には釦は二行に打拔きに附けて數は三個が流行丈は長めで此の「オーバ」には衿に天鵞絨を着けず地質は鼠色霜降の「ルトン」若しくは「スコッチ」或は「縞玉スコッチ」が新流行であります

次に帽子の流行も英國式

中山帽子は山の高さ鍔の廣さも共に昨年あたりと大差はありませんが少しく説明致します

と山は角張らず聊か丸味を帶ぶる傾きであり其高は四吋半鍔は一吋半位です、中打帽子は去年と全く變りて山は一段低く鍔は薄く平るなものが流行致し色は茶本位にて次で焦茶、紺黒、次に鼠と云ふ順序で御座いませう總じて最近流行の傾嚮は重苦しきものは厭はれてをりまして極輕くして淡白なるもの極軟味なる品が多く御客樣の御歡迎を得るようで御座います、隨て青年向などには切鍔(緣無し)裏無きもの裏ありましても糊氣なきものを歡迎されてをります、「ホック帽子」は年々其需要は益々殖へて參りましたが其流行も亦同時に非常に激しくなり今やホック帽子の本年式のものゝ型は大形を悅こばれ色は茶本位にして鼠色之に次ぎ柄は霜降と格子の二種が大流行、又其地質は駱駝、「ホームスパン」「スコッチ」の順序です、

次は衿飾の新流行

ネクタイの流行は當然洋服其物の流行に伴なはなくてはならぬものであります、而して世界流行の三大中心なる倫敦巴里紐育の三都會の精粹なるものを見てそれに意匠をし又は織地を工夫して日本式を打出すのであります而し目下其流行同じく英國式にありまして極めて堅實なる趣味が歡迎されます例へば、色も紺、紫紺、黑と云ふ類で地質も縞柄も共に堅確細緻と云ふような物が流行である、地質にては「ムシロ地」と稱する極めて堅固細密の織生地のものか最新流行として一班の需用に適します、

無駄飯食には見ゑぬ衣物

孤月

昔丁抹と云ふ國に或る一人の金滿家がありました、或る時二人の機を織る職工が參りまして、私等は不思議な機を織るものでありますがどうか御使ひ下さいと云ひ升から、夫れは如何なるものを織るのかとのお尋づねに兩人のものは實に不思議なるものでチャンと已の職業を忠實にやつて行くものでなくつては其の布は見えぬ無駄飯食ひには、更に眼にかゝらぬと云ふ不思議の布を織るので御座いますと申すから、金滿家の主人も成る程之れは面白いことを言ふものだ、己れの召使の中にも此の布の見ゑる忠實な者と、其布の見ゑない無駄食が居るであろうから一つ此布を以て試してやろうと、早速其者を雇入れて一つの工場を建て、其處で兩人に不思議な布を織らせる事に致しました、

主人は大勢の召使に見せてやろうと思ひまして、先づ始めに一番古參の召使ひに命じて、其方彼の工場へ參つて不思議の布を見て參れと言ひ付けられたので直ぐ樣工場へ行つて見ると兩人のものは大汗を流しながら頻に機を織つて居る、側へ行つて見たが一向に見ゑない、併し見ゑないと云ふと無駄飯食ひになるから、之れは結構なものでず何と云ふ模樣ですかと、見ゑたふりをして兩人の者に聞きましたら、へえ之れはカラ摸樣と申します、窓模樣ナール程、早速主人に能く見ゑました、空模樣と申しまして美しいものありますと申上た、夫れなら宜ろしいお前は忠實のものだ、其から次の者其又次の者と順次見させました處何れもよく見ゑましたと申出たので主人は大に悅んで之れなら内の召使のものには一人も無駄飯食はないと安心して居りました、夫れから愈々出來上つたと主人に申上たら、さう云ふ不思議の布なれば已の衣物に仕立ろと職工に命じました、

其處で兩人のものは、不思議なる布を以て、主人の衣物を造り、三寶に載せて今日は納めると云ふので召使一同がズート居並ぶ、主人に於ても自分は無駄飯食であろうか、我眼には見ゑるだろうか、自分でも疑があつたのであります、其處へ恭しく彼等が三寶に載せて捧げて參りましたので之を御覽になると一向に見ゑない、オヤッ之れは自分には見えん、此れはけしからん、眼をこすつて見たがさつ張り見ゑない、仕方がないから、ウム之れは結構じや幸い今日は自分の誕生日であるし、殊に芽出度い事であるから、其の新調の服を身に着けて一同に見せてやるから、己に其の衣物を着せよと命じまして犢鼻褌一のになつてしまつた、此處で兩人は之を主人に御着せ申す、處が主人も着せたと云ふが一向身体にさわらぬ樣だけれども、一同に向つた、只今新調の衣を着けたが似合ふたか如何と云はれたので、一同の者もよく見ると、オヤッ!! 大將全然犢鼻褌一つで起立して居られる、けれども衣物が見ゑぬと云ふ譯にもいかぬから、誠に御身に適した結構なもので御座い升ど一同申上げた、

主人公大滿足、然らば町中の人に見せてやると云ふのでヒラリと馬に跨つて堂々と都大路を歩く、さあそうすると八方から不思議の衣物を見物しようと、ワイ〳〵往來に立つて居る、處が見ると金滿家の主人公犢鼻褌一つで馬に乘つてドン〳〵行かれる、其處で見物の人々も更らに衣物が見ゑない、併し見ゑないと言へは無駄飯食ひと思はれるかちお互に見ゑた振りをして實に立派だ、身体に寸分の隙もないと我れ人共にあれが見ゑぬ事があるものかと虚勢を張つて居るが、小供は正直です、まるで犢鼻褌一つで乘つて行くから、ヤア眞裸体で乘つて行カアと小供はアハ、大笑ひをして居り升、其處で主人も馬の上で始めて氣が付いて見れは全く裸体に違ひないと直樣引返して、其駄飯食ひは見ゑぬ不思議な衣物なぞと申して吾れを欺いた憎むべき兩人のも

のは最早退散して行衛不明になつてしまつたと云ふ事です、

之れは世の中を誠めん丁抹のお話で御座い升

俳句

長生庵妓樂宗匠撰

花野

花いろ〳〵秋面白き野原かな
遠乘りの駒嘶くや花野道
一日を寫生に暮す花野原
駕籠降りて歩く數丁や花野原
とぼ〳〵と花野三里に日の暮る
花野原歩く道さへなかり鳧
花野から富士迄續く眺め哉
旅僧の草鞋捨たる花野か南
武夫の馬を迷はす花野かな
團子賣る茶屋一軒の花野哉
連て行く子に日の暮る花野かな
虫啼いて趣の增す花野かな
歌ひつれ呼つれ遊ぶ花野かな
放れ馬つなぐ杭打つ花野か南
花の野や海老茶袴のやさ姿
花折れば虫の逃ゆく花野哉
旅僧の道を花野に迷ひけり
花野行く小町草履の乙女か南
斥候の伏かくれたる花野哉
譯もなく今日も花野に暮し鳧

砧

我が里はきぬたの音に更にけ利
虫鳴けばはたと止たるきぬたかな
淋しさに寢られぬ夜半や遠きぬたかな
かりがねの月横ぎるや遠きぬた
月三更きぬたの止みて只さびし
眠そうにきぬた打つ夜や雨の音
瀧の音過ぎて小村のきぬた哉
このやぶに人の住かやきぬた打
音聞けば亡き祖母思ふきぬた哉
夕暮れて宿なき旅をきぬた聞く
玉川の水に音澄むきぬたかな
嫁はまだ馴れぬ手振やきぬた打
月更けて益々はづむきぬたかな
加茂川を挾んで打や小夜きぬた
終夜枕にひゞくきぬたかな
妻戀ふる鹿の聲絶ねてきぬたかな
遠きぬた音聞きほるゝ詩人哉

寢返れば枕の下や遠きぬた
月の夜やきぬた打つ子の色白き

十内

夕映のして美しき花野哉
折り溜て紫捨難き花野哉
妹連れて道捗らぬ花野哉
老將の鍬かたげ行く花野哉
花賣りの急ぎ足なる花野哉
馬子の足聊か緩む花野かな
聞きなれて砧の音に寢る子かな
出征の留守や貞婦のきぬた打
笑ふ子に調子くずるゝ砧かな
睦み合ふ若き夫婦や合きぬた

人

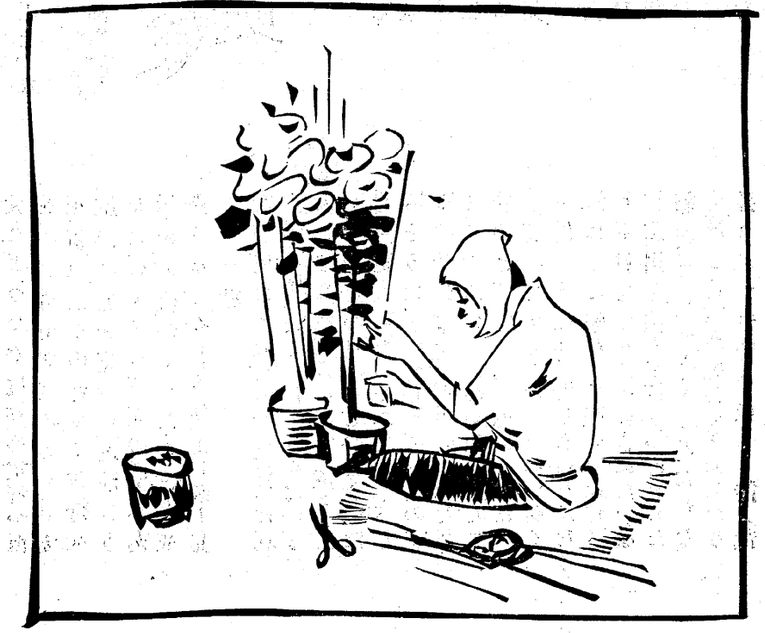
砧打てば鶏鵡返しや谷の家

地

繪筆洗ふ花野の池や暮の色

天

雨止みて音の聞えぬ遠砧



落語

三人一兩損

渡月

相變らず古めかしお笑ひを少しばかり書く事に致しましたが兎角附燒又は旨く參りません其邊は小僧の事ですから大まけに御聞流し否御讀下しを願ひとうございます

『御隱居さん何を見てゐ出なさる

『大岡捌きさ

『何處の騷ぎてげす

『騷ぎじやない捌きと言つてゐ前も知つて居るだろう名奉行の旨い御捌きを書いただが嘘つぱちの作り事も中には有るだろうが罪がなくて面白いなあ

『ア、講釋で聽きましたよ、天一坊の話は知つて居ますがなか〳〵面白いものでげす

『夫ばかりじやない澤山あるが其中に三人一兩損と言ふ話は一寸面白いなあ

『何う言ふ話でげす

『三人で一兩損をしたと言ふ話だ

『其樣事は珍らしくは無い、横町の旦那は三人で相場をして千圓も負けたつてね

『イヤ其樣馬鹿な話ではない、三兩落した男が有つたのだ

『何んて粗々つかしいやつでげしよう、何處い落したのでげす

『何處とも書いてないが、其三兩を又拾つたものが有ると思ひなさい

『何んて間がいんでしう、旨へ事をしやがつて已れが先へ行けばよかつがなー

『何處へ

『其處へ

『話だよう

『そうでしたねー

『そして其拾つた人が落し主を探して持つて行た處が其人は受取なかつたとさ

『余程不足して居ましたかね、はゝあ其野郎拾ひ賃の先取りをしやーがつたと見へる

『其んな譯じやないよ前は馬鹿に先廻りが宜過ぎて困る

『それでも取らないと言ひますから
『ナニサ左樣言ふ譯じやない其落し主は至つて正直もので、其人が言ふのに、何う致しまして最一遍落した以上は其金に緣が無のだから三兩はお前さんに上げましようと云つて取らない
『處が拾つた男も正直だから、なか〳〵貰はない、それは飛んだ話でげす、私がお貰ひ申す筋がございませんと强情を云つて爭ひましたとう〳〵喧嘩を始めてしまいました
『たや〳〵私が其時にに居れば直に仲裁に這入て皆貰つてやるのに
『串談じやない是から宜くに聞き
『聞かずにや居られない夫からどうしました
『どう〳〵恐れながらと御白洲へ持出した
『大變なことになつちまつた
『すると時の奉行、大岡越前の守樣が大層感心をなさいまして、夫れから己れが一兩出して四兩にすると仰しやつて……
『又一兩殖たあ
『其四兩を二つに割つて双方へ二兩づゝ下され

た、其を捌きが面白い、落したものは三兩の處を二兩とれば一兩の損、拾つたものは三兩貰ひたのを二兩とすれば一兩の損、又大岡樣は一兩を出したのだから是れも一兩の損と言ふ一件、三人一兩損と云ふはそれで落着し原告被告仲よく二兩づゝ分けて引下つたと書いてある、昔しの人は正直だが今の人はお前の樣に慾張りだから困るんだ
『オヤ隱居さん私だつて是れでも日本人の胤でげさあ、一兩損の眞似事位は出來升あ其樣に馬鹿にしたもんじやあ無へ
『怒んなさんな
『ナニ怒りもしぬへが今だつて隨分正直のものも有まさあ
『何しろ馬鹿慾を渴くと理に背く事もあるものだ何んでも人間は正直にすれば惡い事は無いものだ
『最う分りましたよ左樣なら……何だ人を馬鹿にして居やあがる日の短かいのに飛んだた談議を聞いちまつたあ、が併し三人一兩損……此奴は面白いなあ、何かそんな喧嘩は無いか

知らん一番已がうまく捌いてやりたいもんだ、すると隱居さん斗りじやあ無へ友達も驚いて、八公は實にいらいと言ふ評判になれば一圓位で立派な男になるからな、たや大層人が立て居るがもし〳〵何んでげす
『喧嘩で御座い升、今やつと引分けました
『ニ喧嘩だ、何の間違ひなのだ、ヤ手前は粂と留じやないか、何だつて往來中なんぞで喧嘩なんぞするんだい見つともない
『たつてあんまり分ら無へからよ
『ナニ手前が分ら無いんだい
『たい〳〵待ねい、マア一体どうしたんだ
『兄弟斯う言ふ譯だ
『そうゆう譯か
『分つたかい
『少とも分らない
『分らない筈だまだ言ないんだもの
『夫ぢやどう言ふ譯だ
『實はねい昨夜は丁度休んだから皆なで不動樣の緣日へ行かうと約束をしたんだ
『うん〳〵

『今度の戰爭はもう譯もなく膠州灣が落ちそうだしたまけに相變らぬ大勝利續きだから名々一圓づゝ持寄りにして歸りに、小川菊で一杯やつけちまつたんだ
『成程
『ところで來なへ奴は矢張一圓取る極だあ夫に此奴がた前逃げつちまやがつたから此處で逢たのを幸ひ一圓出せと言のに其樣な理屈は無いと言あがる、實は此奴のぶりは已れが一圓立替て出して飲ぢまつたのだから一圓已らあ損にならあ
『ウン尤もだ、一圓出しない
『だつて行かないのに一圓只取られるのは詰らない話だ打棄る樣なものだ
『打棄る……馬鹿にするない
『これ〳〵待て〳〵已れが捌いてやるから待ちな、待ちなよ、一圓立替ると一圓出せないと、一圓の損と來ちまつた、占めたな、斯う旨へ話もないもんだ
『ナニが旨いものか一圓損をするんだ、已らあ出すのは眞平だよ

左右両頁露光量調整、重複撮影

『ナ腕づくでも取て見せる、取らなければ承知が出來ない

『尤もだぐ〜まあ待ちねへつて事よ、何でも宜いから手前一圓出しな宜いから一圓出しな、そら己れも一圓出すから

『變だなあ、た前が一圓出して呉れて已れにも一圓出せと云ふのかい

『宜つてへ事よ、斯して二圓にして捌くんだから一圓出しねへ

『ウ成程流石がに兄いはゐらいもんだ

『分たつかい

『分つた〜さあ一圓出そう

『斯うして二圓にして懐中へ入らあ

『ヲヤた前が一圓出して已に一圓出せと言ふから其二圓を二つに分つて一圓づゝ取れと言のかと思つたら二圓一人で取ちまつちや分らない

『已れの方へ一圓呉れるのぢやないのか

『ヤ手前達は大岡越前守と云ふ人を知るめい

『大岡越前守を知らない奴があるもんか

『己れだつて知つて居らあ

『知つて居るなら分りそうなもんだ、今隠居さんの處で聞たのでほや〜だ、三人一兩損と云てな、三人で一兩損をする捌き方だ、昔の人は正直だぜ、今の人は慾張つてばかりいていけなへや、手前達の様な者が居るから仕様がない怒んなさんなよ

『なんだかさつぱり分らねいが、三人一兩損と云ふのは講釋で聞いたが何んでも御奉行が一兩出して三人で一兩損をしたとか何とか云つたつけ

『夫だ〜、だから己が一圓出してそれ手前は一圓取ず、手前は取れる皆で一圓損よ

『たがお前は其一圓を懐中へ入れて何する

『歸りに落さあ

◀御華客様の御便利を計り▶

電車川越發汽車大宮發時刻表

電車川越發	上り 大宮行	汽車大宮發	上り 高崎行
午前		午前	
五、〇〇	上野	五、〇〇	上野
六、三〇	新宿	六、一〇	熊谷
七、三〇	寄居	七、一〇	高崎
八、〇〇	熊谷	八、一〇	前橋
八、三〇	前橋	九、一〇	宮井
九、〇〇	日光	一〇、一〇	直江津
一〇、〇〇	福井	一一、一〇	日光
一〇、三〇	大宮	一二、一〇	小山
一一、〇〇	水戸	一、一〇	兩毛
一一、三〇	兩毛	二、一〇	青森
一二、〇〇	白河	三、一〇	福島
一二、三〇	長野	四、一〇	前橋
午後		午後	
一、〇〇	福島	五、一〇	長野
一、三〇	高崎	六、一〇	青森
二、〇〇	前橋	七、一〇	新潟
二、五〇	大宮	八、一〇	宇都宮
三、〇〇	直江津	九、一〇	仙台
三、三〇	仙台	一〇、一〇	桐生
四、〇〇	日光	一一、一〇	福井
四、三〇	大宮		
五、〇〇	小山		
五、三〇	兩毛		
六、〇〇	青森		
六、三〇	宮山		
七、〇〇	黒磯		
八、〇〇	新潟		

注意（●印ハ急行券入用、印ハ時ヲ表ス）

電車大宮發汽車大宮着時刻表

上り 汽車大宮着	電車大宮着
午前	午前
上野	上野
六、一〇	六、一八
七、一〇	七、三〇
八、一〇	八、三〇
九、一〇	九、三〇
一〇、一〇	一〇、三〇
一一、一〇	一一、三〇
一二、一〇	一二、三〇
一、一〇	一、三〇
二、一〇	二、三〇
三、一〇	三、三〇
四、一〇	四、三〇
午後	午後
五、一〇	五、三〇
六、一〇	六、三〇
七、一〇	七、三〇
八、一〇	八、三〇

左右両頁露光量調整、重複撮影

『腕づくでも取て見せる、取らなければ承知が出來ない

『尤もだ〳〵まあ待ちねへつて事よ、何でも宜いから手前一圓出しな宜いから一圓出しな、そら己れも一圓出すから

『變だなあ、た前が一圓出して呉れて已れにも一圓出せと云ふのかい

『宜つてへ事よ、斯して二圓にして捌くんだから一圓出しねへ

『ウン成程流石がに兄いはねらいもんだ

『分たつかい

『分つた〳〵さあ一圓出そう

『斯うして二圓にして懐中へ入らあ

『ヲイた前が一圓出して已に二圓出せと言ふから其二圓を一つに分つて一圓づゝ取れと言のかと思つたら二圓一人で取ちまつちや分らない

『已れの方へ一圓呉れるのぢやないのか

『ヤ手前達は大岡越前守と云ふ人を知るめい

『大岡越前守を知らない奴があるもんか

『己れだつて知つて居らあ

『知つて居るなら分りそうなもんだ、今隠居さんの處で聞たのではや〳〵だ、三人一兩損と云てな、三人で一兩損をする捌き方だ、昔の人は正直だせ、今の人は慾張つてばかりいていけなへや、手前達の様な者が居るから仕様がない怒んなさんなよ

『なんだかさつぱり分らねいが、三人一兩損と云ふのは講釋で聞いたが何んでも御奉行が一兩出して三人で一兩損をしたとか何とか云つたつけ

『夫だ〳〵、だから己が一圓出してそれ手前は一圓取ず、手前は取れる皆で一圓損よ

『だがお前は其二圓を懐中へ入れて何する

『歸りに落さあ

◀御華客様の御便利を計り▶

電車川越發瀛車大宮發時刻表

電車川越發	上り大宮行	上野行	上り瀛車大宮發	駅名	下り瀛車大宮發	下り着	駅名	電車川越發
午前								
五、一〇	六、四三	青	森	黒	磯	六、一〇	森	一二、三〇
六、〇〇	七、一〇	新	瀛					一一、〇〇
六、三〇	七、三〇	宇都宮				七、二四	新	一〇、三〇
七、〇〇	●八、一六	青	森	八、〇〇	一ノ關	八、三二	前	一〇、〇〇
七、三〇				八、一八	瀛	九、一八	橋	九、三〇
八、〇〇	八、五三	前	橋	九、四六	山	富	山	八、三〇
八、三〇								八、〇〇
九、〇〇	一〇、〇一	日	光		光	日	光	七、三〇
九、三〇	一〇、二八	福	井	一〇、三一	青	一一、一七	直	一一、〇〇
一〇、〇〇	一〇、四五	大	宮		森		江	一〇、三〇
一〇、三〇							津	一〇、〇〇
一一、〇〇	一一、一七	小	山	九、四六	日	一〇、四二	日	九、三〇
一一、三〇	一二、一八	兩	毛		光		光	八、三〇
一二、〇〇								八、〇〇
一二、三〇	一二、四三	白	河	二、四三	小山兩毛	二、五〇	日	一二、〇〇
午後								
一、〇〇	一、二六	長	野	一、四四	青	一、一七	直	一二、三〇
一、三〇							江	一、〇〇
二、〇〇	一、五八	福	島	二、五八	長		津	一、三〇
二、三〇								二、〇〇
三、〇〇	二、五一	前	橋	三、五〇	福	三、〇一	前	二、三〇
三、三〇								三、〇〇
四、〇〇	三、五三	直	江		嶋	四、五一	福	三、三〇
四、三〇	四、一三	仙	津		野		井	四、〇〇
五、〇〇								四、三〇
五、三〇	五、一五	日	光		森	四、五一	福	五、〇〇
六、〇〇	六、〇六	小山兩毛				五、二一	白	五、三〇
六、三〇	六、三五	青	森	六、一八	梶	六、一八	河	六、〇〇
七、〇〇	七、三〇	富	山				生	六、三〇
七、三〇	八、〇三	黒	磯	七、〇六	仙	七、〇六	台	七、〇〇
八、〇〇	九、〇一	新	潟	八、一〇	新	八、一〇	青	七、三〇
	九、四二	仙	台	八、四〇	宇都宮	九、四二	新	八、一〇
						一〇、四二	青	九、〇〇
						一一、四二	森	九、三〇

注意(●印ハ急行券入用、印ハ時ヲ表ス)

電車大宮發瀛車大宮着時刻表

電車大宮發	上野發時刻	駅名	上り瀛車大宮着	駅名	下り瀛車大宮着	下り川越行
午前						
五、二〇	六、四〇	青	森	六、二八	青	六、三〇
六、一八	七、三	同	瀛	七、二九	森	七、〇〇
七、三	七、二〇	新	潟	七、〇七	新	七、三〇
七、二〇	七、五七	宇都宮		七、二七	宇都宮	八、〇〇
七、三〇	八、一八	青	森	八、一四	青	八、三〇
八、一三	八、四六	前	橋	八、四九	前	九、〇〇
九、一三	九、四四	日	光	九、五七	日	九、三〇
九、三〇	一〇、二六	福	井	一〇、二五	福	一〇、〇〇
一〇、三五						一〇、三〇
一一、一三						一一、〇〇
一一、三〇	一一、四七	小	山	一一、四五	小	一一、三〇
一二、〇〇	一二、一七	兩	毛	一二、一五	兩	一二、〇〇
午後						
一、四〇	一二、三七	白	河	一二、三三	白	一、〇〇
一、三五						一、三〇
二、〇〇	一、四〇	長	野	一、二一	長	二、〇〇
二、二〇	一、五八	福	島	一、五六	福	二、三〇
二、三〇						三、〇〇
三、〇〇	二、五六	前	橋	二、四六	前	三、三〇
三、三〇						四、〇〇
四、〇〇	三、四〇	直	江	三、四八	直	四、三〇
四、三〇						五、〇〇
五、〇〇	四、一三	仙	津	四、〇九	仙	五、三〇
五、三〇	五、一八	日	光	五、一〇	日	六、〇〇
六、〇〇	六、〇一	小山毛	両	六、〇一	小山毛	六、三〇
六、三〇	六、三一	青	森	六、三一	青	七、〇〇
七、〇〇	七、二五	富	山	七、二五	富	八、一〇
七、三〇	八、〇七	黒	磯	八、〇〇	黒	九、〇
八、一〇						

左右両頁露光量調整、重複撮影

◀川越鐵道汽車時間表▶

（東京行）

午前五時十五分
仝　六時十分
仝　七時五十五分
仝　九時
仝　十一時
午后十二時卅分
仝　二時
仝　三時四十分
仝　五時五分
仝　六時四十五分
仝　八時三十五分
午前七時四十七分
仝　八時四十五分
仝　十時廿二分
仝　十一時五十九分
午后一時五十一分
仝　三時廿二分
仝　四時卅七分
仝　六時廿七分
仝　八時八分
仝　九時五十四分
仝　十時卅三分

（川越着）

◀東上鐵道汽車時間表▶

川越驛發

午前五時二十分
仝　七時二十分
仝　九時二十分
仝　十時二十分
午后一時十五分
仝　三時十五分
仝　五時十五分
仝　七時十分
仝　九時五分

川越驛着

午前六時卅五分
仝　八時卅五分
仝　十時卅分
午后十時卅五分
仝　二時三十分
仝　四時卅二分
仝　六時三十分
仝　八時廿五分
仝　十時二十分

自動車發着時間表

川越發

午前七時三十分
仝　十時三十分
午后一時三十分
仝　三時
仝　四時三十分

越生發

午前六時
仝　七時三十分
仝　九時
正午十二時
午后三時

◀馬車發着時間表▶

▲川越發　▲桶川發　川越、桶川間

午后三時　午前八時

川越、松山間

▲川越發　▲松山發

午前七時　午前六時卅分
仝　九時　仝　八時卅分
正午十二時　仝　十一時三十分
午后三時　午后二時卅分
仝　五時　仝　四時卅分

川越、大井間

▲川越發　▲大井發

午前七時　午前七時
仝　九時　仝　九時
仝　十一時　仝　十一時
午后一時　午后一時
仝　三時　仝　三時
仝　五時　仝　五時

▲川越發　▲桶川發　川越、上尾間

午前七時半　午前七時卅分
仝　十時卅分　仝　十時卅分
午后一時卅分　午后一時卅分
仝　三時　仝　三時四十五分

川越、越生間

▲川越發　▲越生發

午前八時　午前六時
仝　十一時　仝　八時
午后一時　仝　十時
仝　二時　正午十二時
仝　四時　午后二時

川越、島田間

▲川越發　▲島田發

午前十一時　午前八時
午后二時　仝　九時
仝　四時　午后三時半

小巾縮緬之部

小巾白丹後縮緬　上中並　五圓五拾錢　七圓也　九圓也
仝　白濱縮緬　上中並　九圓　拾圓　五圓
仝　白變縮緬　拾圓ヨリ　七圓八圓
仝　白染下地　拾圓ヨリ　八圓參圓迄
仝　白絹縮染下地　拾圓ヨリ　八圓參圓迄
仝　縮緬色物　上中並　拾壹圓　八圓六圓
白及四色物　上中並　拾壹圓　八圓六圓
紋絹縮　上中並　拾壹圓　八圓六圓
小巾白縮緬　上中並　拾壹圓　八圓六圓
丈物　上々並　拾壹圓　六圓迄

形物之部

小紋縮緬　上中並　拾壹圓　九圓七圓
三丈物　上中並　拾壹圓　四圓
仝　四丈物　上中並　拾壹圓　四圓
仝　更紗縮緬　上中並　拾壹圓　八圓六圓
小巾友仙縮緬　上中並　拾壹圓　參圓
仝　玉糊赤地　上中並　拾壹圓　八圓六圓
紋羽二重友仙疋　上中並　拾壹圓　五圓
羽二重友仙疋　上中並　拾壹圓　四圓
八ッ橋友仙疋　上中並　拾壹圓　六圓
紬友仙疋　上並　拾壹圓　八圓
太織友仙疋　上並　拾壹圓　八圓
仝　更紗小紋疋　上中並　拾壹圓　五圓六圓
友仙模様縮緬　長襦袢　拾參圓ヨリ　貳拾參圓迄

御召之部

本御召　上中並　拾壹圓　五圓　下並　六圓九圓
仝　無地物　上中並　拾壹圓　五圓八圓
高貴織　上々並　拾壹圓　參圓　中並　五圓七圓
仝　コート地　上中並　拾壹圓　貳圓　八圓

左右両頁露光量調整、重複撮影

◀川越鐵道汽車時間表▶

午前五時十五分
仝　六時十分
仝　七時五十五分
（東）仝　九時
仝　十時
仝　一時
午后十二時卅分
（行）仝　二時
仝　三時四十分
仝　五時五分
仝　六時四十五分
仝　八時五十五分
午前七時四十七分
仝　八時四十五分
仝　十時廿二分
（川）仝　十一時五十九分
午后一時五十分
仝　三時廿二分
（越）仝　四時卅七分
仝　六時廿七分
（着）仝　八時八分
仝　九時五十四分
仝　十時卅三分

◀東上鐵道汽車時間表▶

川越驛發
午前五時二十分
仝　七時二十分
仝　九時二十分
仝　十時二十分
午后一時十五分
仝　三時十五分
仝　五時十五分
仝　七時十分
仝　九時五分
川越驛着
午前六時卅五分
仝　八時卅五分
仝　十時卅分
午后十二時卅五分
仝　二時三十分
仝　四時卅二分
仝　六時三十分
仝　八時廿五分
仝　十時二十分

自動車發着時間表

川越發
午前七時三十分
仝　十時二十分
午后一時三十分
仝　三時
仝　四時二十分
越驛發
午前六時
仝　七時三十分
仝　九時
正午十二時
生時
發
午后三時

◀馬車發着時間表▶

▲川越、桶川間
午后三時午前八時
▲川越發
▲桶川發
午前七時半午前八時卅分
▲川越、上尾間
▲川越發
▲上尾發
仝　十時卅分
午后一時卅分
川越、松山間
▲川越發
▲松山發
午前七時午前六時卅分
仝　九時
仝　八時卅分
午后一時卅分
仝　三時
仝　四時卅分
仝　六時卅分
▲川越發
午前十一時
午前八時
仝　十一時
仝　十時
午后一時
仝　二時
午后二時
仝　四時
午后三時
▲川越發
▲大井發
川越、大井間
午前七時
午前七時
午后三時
仝　五時卅分
▲川越發
午前八時
午前六時
仝　十一時
仝　十時
▲川越發
▲島田發
川越、島田間
▲川越發
▲越生發
川越、越生間
午后二時
仝　三時
仝　五時
午后二時
仝　四時
午后三時
午后一時
仝　三時
仝　五時
午后二時
仝　四時
午后三時
午前十一時
午前八時
午后一時
午后九時

小巾縮緬之部

小巾白丹後縮緬　並五圓五拾錢
上中七圓也
上九圓也
仝白濱縮緬　並九圓
上中拾貳圓
上拾五圓
仝白變縮緬　白染下地
上拾圓ヨリ
拾七八圓
仝白鶉縮緬　並拾五圓
上拾圓
仝白絹縮染下地　八圓ヨリ
拾參圓迄
仝縮緬色物　並六圓
上中八圓
上拾壹圓
上々拾五圓
白及四色物　並六圓
紋絹縮　中八圓
上拾圓
小巾白縮緬　並八貳圓
四丈物　中拾六圓
上拾貳圓
上々貳拾五圓迄

形物之部

小紋縮緬　並七圓
三丈物　中九圓
上拾壹圓
仝四丈物　並九圓
上中拾四貳圓
更紗縮緬　並六圓五拾錢
上中八圓
小巾友仙縮緬　並八圓
上中拾壹圓
貳拾圓迄
仝玉糊赤地　並六圓五拾錢
上中八圓
上拾圓
紋羽二重友仙疋　並拾參圓
上中拾八五圓
羽二重友仙疋　並拾四圓
上中貳拾五圓
八ッ橋友仙疋　並拾拾四貳圓
上中拾六圓

紬友仙疋　並八圓
上拾壹圓
太織友仙疋　並六圓
上八圓
仝更紗紋疋　並五圓五拾錢
上中六圓五拾錢
上八圓
友仙模様縮緬長襦袢　拾參圓ヨリ
貳拾參圓迄
本御召　並九圓
上中拾貳圓
上拾五圓
仝無地物　並八圓
上中拾貳圓
上拾五圓
高貴織　並七圓五拾錢
上中拾五圓
上々拾參圓
仝コート地　並八圓
上中拾貳圓
上拾貳圓

御召之部

下六圓五拾錢

全 白 白 白 白 博 死 山
紋 羽 羽 朱 綸 斯 斯 吹
八 盡 二 珍 子 多 朱 織
丈 瀬 重 全 丸 全 子 尺
物 足 足 帶 全 全 三
上中並 上中並 上中並 上並 上中並 上並 上中並 上中並
貳拾 拾拾拾 五四參 貳拾拾 拾七 五參貳 八六 壹五 參貳壹
拾五 拾拾拾 拾八參 五 圓圓 圓 拾 圓
貳圓 七五參 拾拾拾 五五 拾拾 圓錢 五
圓ヨ 拾 ヨマ 拾
迄リ 圓圓圓 圓圓圓 圓圓圓 圓圓錢錢 圓圓 圓圓錢

雜品之部

大羽 全 全全 全縮 全全 兵白 白 三白 本
巾二 綿 綿 珍 縮 丈綸 場
兵重 交 中 絞 大 兒綿 三丈八 八子 白
兒絞 中 大 中 尺反 斜
帶リ 巾 巾 巾 帶巾 尺 物物 子
上中並 上中並 上中並 上中並 上中並 上上中並 上上中並
五參貳 貳壹 四參貳 八六四 拾六參 四參貳 八七五 ヶ貳拾拾
圓圓 圓 圓 圓 圓 圓 參 圓
圓五五 圓圓 圓 圓 五 拾四壹
マ拾拾 マヨ 拾 拾
デ錢錢 デリ 圓圓圓 圓圓圓 圓圓圓 圓圓圓 外 錢圓圓 圓圓圓

全 縮 全 帶縮 毛 男縮 紺 瓦 新 全 太
綿 綿 綿 物縮 絞 斯 絹 子 織
半 縮 下 揚及 斯 無袖 白 兵 供 兵
袖 リ 黑 兒 全 兒
絹 袷 ゲ 縮 全 双地 全 全 帶
上中並 上中並 上中並
拾 貳參 壹八 貳壹八 壹壹 五四貳 貳九 貳 七四 壹五貳 壹八
四 拾 拾 圓 圓 圓 拾 參 拾拾 圓拾
五 圓錢 圓參拾 貳圓 六 五錢 拾 錢錢 圓拾拾 五錢
錢 前ヨ 圓ヨ マ拾 拾ヨ 拾マヨ 錢 マヨ マ 拾ヨ
後リ 位リ デ錢錢 拾リ 圓圓錢 デリ 位 デリ デ錢錢 錢リ

綿朱 全 丸厚 綿幽 絲 御召 御 紋
珍 板 錦織 上々 召 召 御
本 綿ナ 織 ナ谷 枚江 但 但 御
ナ貫 綿 丸 戸 縦ヨリ 牢
丸 シ 綿 重妻 模ト 牢
シ帶 帶 帶入 シ織 上中並 付地 上並 上中並
上上中並 上中並 上中並 拾八四 五參 壹五參 拾拾 貳拾拾
參貳拾 參貳拾 拾 拾 拾 參貳 拾 拾 五 五參 拾五貳
五 拾拾拾五 拾拾參 貳 拾 百拾拾 拾五 圓 圓 圓 圓
拾 圓ヨ 圓ヨ 圓ヨ 圓圓 圓圓 圓圓 圓圓 圓圓 圓圓
圓圓圓圓 圓圓圓圓 圓圓圓圓 迄リ 圓圓圓 迄リ 圓圓錢 圓圓 圓圓 圓圓錢

帶地之部

靜 博 全 片厚 本 片朱 丸黑 朱
ケ 多 綿 板 朱 珍 朱 但 七シ珍
織 九 ナ 側織 珍 側 子 八牢 分文 絹綿
九 寸 シ 帶入 側 帶 額 絹ハ貫
寸 上中並 上上中 上中並 上中並 上上中並 帶付 上上中並
上中並 上上中並 上上中 上上中 上上中並 上上中並 上上中並 上上中並
八六四 ヶ五四參 ヶ七五 四參 八六四 參貳壹 ヶ八五參 ヶ拾八六
圓 七圓圓圓 九 圓 圓 圓 拾 圓 拾
五 五五五 圓 五 貳 五 五 貳
拾 拾拾拾 ヨ 拾 拾 拾
圓圓錢 圓錢錢錢 圓圓圓 迄リ 圓圓錢 圓圓圓 圓圓圓 圓圓圓 圓圓圓 圓圓錢 圓圓圓 圓圓圓

全 綿朱 更 瓦 御 羽 絹 絹 山 靜
珍 紗 斯 召 二 立 立 吹 ケ
綿 及 博 織 重 色 綿 織 織
ナ尺 友 多 九寸 友 額 九 綿
入 仙 九 綿入 仙 帶 付 寸 織
シ三 帶 寸 帶 子 寸
上中並 上中並 上並 上並 上中並 上中並 上中並 上並
七四參 拾拾八 五貳 六四 參壹 五參 壹壹 壹壹 貳壹八 參貳
拾 拾 圓 圓 圓 參圓圓 圓 圓
五 拾錢 拾拾 圓平錢 圓五 圓八貳 拾 圓參拾
錢ヨ 錢ヨ 拾 拾拾 拾ヨ 拾
圓圓圓 圓圓圓圓 迄リ 錢錢 迄リ 迄錢 迄錢錢 迄リ 迄錢錢 圓圓

ハンカチーフ　並参拾錢　中五拾錢　上壹圓マデ
縮緬及絹縮ゴキシ　貳圓五十錢　参圓マデ
帶留丸グケ　貳参拾錢
仝朱珍及ビ厚板金具付　並貳拾錢　中五拾錢　上貳圓
羽織紐女物　拾錢ヨリ五拾錢マデ
仝男物人絹製　貳拾錢ヨリ五拾錢位
仝絹糸製　五拾錢ヨリ貳圓マデ
敷布　並参拾五錢　上拾五錢
メリンス風呂敷　参四拾錢
メリンス帶揚　参四拾錢
繪絹各種　二尺三尺　二尺八尺　三尺五尺　直段畧ス

初着之部

無地縮緬紋付　並参貳圓七拾錢　中四圓五拾錢
仝友仙模樣　並五圓五拾錢　中七圓五拾錢
仝大名袖口共紐付　並拾八參圓
縮緬白上リ模樣　並参圓五拾錢　四圓五拾錢
紋羽二重紋付　参四圓位
斜子熨斗目　中五圓　上八圓
黑斜子紋付　並貳圓五拾錢　中参四圓
江戸妻四ツ身引返シ　中拾參圓　上貳拾參圓
縮緬中巾　並八拾錢　壹圓五拾錢

帛紗之部

仝大巾　並参圓　上五圓
壁仝　貳圓マヨリ　四圓マデ
壇瀨仝無双　六圓マヨリ　拾圓マデ
黑縮緬引返シ　並八參圓　中拾參圓　上貳拾參圓
縮緬色物仝　並八圓　中拾五圓　上拾七圓
黑縮緬三丈物　並六圓五拾錢　中拾七圓　上拾五圓
珍色仝　並六圓　中拾五圓　上拾五圓
變地縞入仝　並拾五圓　上拾五圓
紋羽二重三丈物　並六圓五拾錢　上八圓マデ

縮緬石持之部

仝　黑八九圓位
黑羽二重石持　並拾參圓　中拾五圓　上拾八圓
斜子仝　並六圓五拾錢　中八圓　上拾貳圓
黑紬仝　並参四圓　中五圓

模樣之部

江戸稜振袖　並貳拾五圓　中參拾五圓
都模樣振袖　上參拾五圓
仝二枚重留袖　並貳拾五圓　中貳拾五圓　上參拾五圓
江戸稜模樣留袖　並參拾六圓　中拾貳圓　上拾貳圓
都模樣留袖　並拾五圓　上貳拾五圓
島原模樣　並拾七圓
但シ胸ニ模樣有　上貳拾圓

仝二枚重　參拾圓前後
黑八掛模樣　並拾五圓　上拾五圓
仝珍色物　並十五圓　上十五圓

新御召之部

新縮緬大中小柄　並貳圓五拾錢　上參圓
瓦斯御召絣疋　並貳圓五拾錢　上四圓
新縮緬大柄疋　並六圓　上八圓

毛織物之部

本セル反　七八圓
セル綿入　四五圓
クレープセル　五圓前後
綿セル　貳圓前後
本ネル反　並參圓五拾錢　中四圓　上四圓八拾錢

新ネル反　並壹圓參拾錢　上壹圓八拾錢
縞毛斯　並貳圓五拾錢　上參圓五拾錢

袴地之部

本仙臺　並拾參圓　中拾參圓　上拾五圓
博多　並八圓　中拾參圓　上拾參圓
仝別上　貳拾圓マデ
末廣平裏付　並拾五圓　上貳拾五圓
塩瀨平　並拾參圓　中拾五圓　上貳拾圓
八王子平　並五圓　中六圓　上八圓
瓦斯平　並壹圓貳拾錢　中壹圓六十錢　上貳圓貳拾錢
糸入平　參圓前後

小倉小供物 並五拾錢 上七拾錢

瓦斯平小供物 壹圓前後

本カシミヤ女袴地 參四圓

綾毛斯 全 貳圓八拾錢ヨリ

絹毛斯 全 壹圓五拾錢

毛斯袴女物小九拾錢 仕立上リ大壹圓貳拾錢

綿カシミヤ大八拾錢 女袴仕立上リ小六拾錢

絹綿交織之部

好評紬 反 並八拾錢 上壹圓參拾錢

絲入結城反 壹圓ヨリ 壹圓參拾錢

絲入瓦斯 並壹圓 上壹圓七拾錢

糸入別上全及ヒ壹圓五拾錢ヨリ變リ拵反 貳圓五拾錢マデ

絲入瓦斯大拵 參圓 疋物 四圓ヨリマデ

新紬別上反 貳圓五拾錢ヨリ

瓦斯高貴 壹圓貳拾錢マデ

絲入利久 貳圓ヨリマデ

瓦斯無糸四ッ反 並壹圓五拾錢 上壹圓八拾錢

双子織 並七拾錢 上壹圓八拾錢也

全疋物 並壹圓六拾錢 上壹圓貳拾錢

遠州縞 並六拾錢 上壹圓八拾錢 壹圓拾錢

糸織之部

米澤糸織疋 並拾參圓 上拾五圓七拾錢

八王子糸織 並拾參圓 大中小拵疋 上拾五圓

全諸糸織反 並九六圓 上拾貳圓

節糸織 全 並四圓 上五圓六拾錢

大島紬絣 並五圓 上六圓八拾錢

本塲大島紬 並拾五圓 上貳圓拾五圓

黑地八丈格子疋 八圓前後 飛地 全 九圓前後

太織之部

伊勢崎絣物 小柄 並七圓 大柄 疋 並九圓 上壹圓 上拾壹圓

全綿入 並五圓 上六圓 上七圓

本塲秩父 並七圓 上八圓 上拾壹圓

飯能銘仙 並六圓 上七圓 上九圓

秩父名仙 並七圓 上八圓 上九圓

名仙綿入 並參圓五拾錢 上四圓五拾錢 上五圓五拾錢

本紡績黃島 全 貳圓ヨリ 貳圓五十錢

綿紡 全 壹圓參拾錢 壹圓七錢マデ

紺地縞 反 並六拾錢 上七拾錢 上九拾錢

唐草 反 並六拾錢 上七拾錢 上九拾錢

綿紡績 疋 貳圓辛錢ヨリ 參圓マデ

夜具地之部

郡内 疋 並拾貳圓 上拾四圓

全綾 並拾七圓 上貳拾參圓

伊勢崎 全 拾圓前後

座布團地之部

綾郡内 疋 拾七圓ヨリ 但十枚取 貳拾五圓マデ

太織 疋 並拾參圓 但二十枚取 上拾五圓

本紡績 疋 並四圓 但二十枚取 上五圓

羽織裏之部

朱珍額付一枚 並參圓 上四圓五圓

純子 並五圓 上七圓拾圓

一羽二重友仙 並四圓 分枚 上五圓六圓

八ッ橋友仙 全 貳圓五拾錢ヨリ 參圓

綿入朱珍 並壹圓八拾錢 上貳圓五拾錢

甲斐絹 並壹圓貳拾錢 上參圓五拾錢

色絹之部

花色絹 疋 並五圓 上七圓九圓

花絹節物　全　四圓ヨリ六圓マデ
正花絹　全　六圓ヨリ九圓迄
全節物部　五六圓
活色絹疋　五七圓
全節物　全　五圓前後
本紅絹　全　並五圓　中六圓　上八圓
節紅絹　全　並參圓　中四圓　上五圓
色絹糸好　全　並六圓　中七圓　上八圓
白張絹糸好疋　並五圓　中六圓　上八圓
全素張上々　六圓ヨリ九圓迄
白飾胴裏地　並參圓　中四圓　上四圓五拾錢

緋板〆絹疋　並參圓五拾錢　中五圓　上六圓
白地板〆柄疋　七圓ヨリ拾圓迄
變リ
生絹疋　並四圓　中五圓　上六圓
生太織　並四圓　中五圓　上六圓
白上田紬　八圓ヨリ拾圓迄

男帶之部

博多男帶　並貳圓八拾錢　中四圓　上六圓
全別上　八圓ヨリ拾圓前後
紋織五寸　並參圓　中五圓　上八圓
珠珍金糸入男帶　十十五圓ヨリ迄

博多風通袋織帶　並參圓五拾錢　中五圓　上八圓
瓦斯男帶　五拾錢ヨリ壹圓五拾錢

形物之部

木綿大島染　並七拾錢　中九拾錢　上壹圓貳拾五錢
キャラコ黑絣　七八拾錢
全更紗　六七拾錢
木綿更紗　七八拾錢

無地之部

瓦斯銀花　九拾錢ヨリ壹圓六拾錢
全活色正花　全
キャラコ正花銀花活色　七拾錢ヨリ壹圓迄
金巾　全　五拾五錢ヨリ六拾五錢迄

花色木綿　並四拾錢　中六拾錢　上七拾錢
瓦斯紅　並六拾錢　中八拾錢　上壹圓
緋金巾　五拾錢前後
緋木綿　並參拾八錢　中五拾錢　上五拾五錢

外套インバコート之部

外套甲斐絹裏　並拾參圓　中拾八圓　上貳拾參圓
マント　全　四五圓
インバ　並六圓五拾錢　中九圓　上拾參圓
吾妻コート　並七圓五拾錢　中九圓　甲斐絹裏　上拾貳圓

全羽二重裏　並拾參圓　中拾參圓　上拾五圓
本セル半コート甲斐絹裏　直段略ス
右何レモ別誂ハ迅速御好ミニヨリ調達可仕候
女物長卷　直段略ス
シヨール
全變物　全
男卷　全
都腰卷　壹圓ヨリ
小兒用腹掛タイヤー　壹圓參拾錢
女物メリヤス地袢　並四拾錢　中六拾錢　上八拾錢
全股引　五七拾錢
男メリヤス物地袢　並六拾錢　上八拾錢
最上最下ハ此限ニ在ラズ

洋服之部

燕尾服　上八拾圓　中六拾圓
フロックコート　上五拾圓　中四拾圓　並參拾五圓
モーニングコート　上參拾五圓　中貳拾八圓　並貳拾圓
脊廣折袷　上參拾五圓　中貳拾五圓　並貳拾五圓
全結袷　上貳拾五圓　中拾圓　並拾圓
ヲーバコート　上參拾五圓　中貳拾五圓　並拾貳圓
半コート　上貳拾五圓　中拾圓　並拾圓
小供用洋服　上七圓　中六圓　並五圓

外套及マント之部

- 二重廻シ　上四拾圓　中参拾貳圓　並貳拾圓
- 改良長インバ　中貳拾參圓　並貳拾貳參圓
- 縞物マント　上四拾圓　中六八拾圓　並四拾圓
- 縞メルトンマント　上拾圓　中六八拾圓　並六拾圓
- 改良和服用オーバ　上拾圓　中六七拾圓　並六拾圓
- 小供用マント　上六拾圓　中四參圓　並參圓

吾妻コート及羽織袴

- 縞セルコート　上拾八圓　中拾五圓　並拾貳圓
- 改半コート　上拾八圓　中拾參圓　並拾圓
- 本セル羽織　上拾五圓　中九拾貳圓　並拾圓
- 本セル袴　上拾參圓　中八拾參圓　並拾圓
- セル道行　上七圓　中拾參圓　並拾圓
- 白毛布貳枚續キ　上五圓　中七拾圓　並拾圓
- 霜降毛布全　上參圓　中九拾圓　並拾圓
- 模様毛布壹枚物付　上四八圓　中拾圓　並拾圓

毛布之部

毛皮之部

- ラッコ皮襟卷　上百五拾圓　中八拾圓　並拾圓
- 獺皮全　上五拾圓　中五拾圓　並拾圓
- 土豹　上參圓七拾錢
- チントン皮　上五拾圓　中四圓五拾錢
- ラビット　上參圓五拾錢
- 山猫皮　上壹圓四拾錢　中壹圓八拾錢
- 黒中山　上五拾圓　中參圓　並貳圓五拾錢

帽子之部

- 色物中折　上參拾五錢　中貳圓五拾錢　並壹圓
- 新式ホック帽子　上壹圓五拾錢　中壹圓貳拾錢　並七八拾錢

メリヤス之部

- 本毛メリヤスシャツ　上貳圓五拾錢　中貳圓
- 白メリヤス特製品　上壹圓五拾錢　中壹圓參拾錢　並壹圓
- 全太生地製　上八拾錢　中六拾錢　並四拾錢
- （但シ股引トシャツハ同價ノ「）
- 全腹卷付バッチ　上九拾五錢　中七拾五錢

ホワイト類之部

- 縞シャツ　上貳圓五拾錢　中壹圓七拾錢
- ホワイト　上貳圓五拾錢　中壹圓八拾錢　並壹圓參拾錢
- スルメ　上貳拾錢　中八拾錢
- 本ネルホワイト製　上參拾錢　中貳圓八拾錢
- カフス壹組ニ付　上貳拾五錢　中貳拾五錢
- Wカラー　上參拾錢　中貳拾五錢
- 立及折カラー　上貳拾四錢　中拾壹錢
- 軍人カラー　上七錢　中五錢
- チョッキ的壹枚ニ付　上四拾五錢　中四拾五錢

ズボン釣り帯皮

- 絹製　上貳圓五拾錢　中壹圓參拾四錢
- 特製　上九拾錢　中六拾錢
- 茶色帯皮　上五拾錢　中四拾錢
- 全新式金具付　上五拾錢　中四拾錢
- 黒色帯皮　上參拾錢　中貳拾五錢

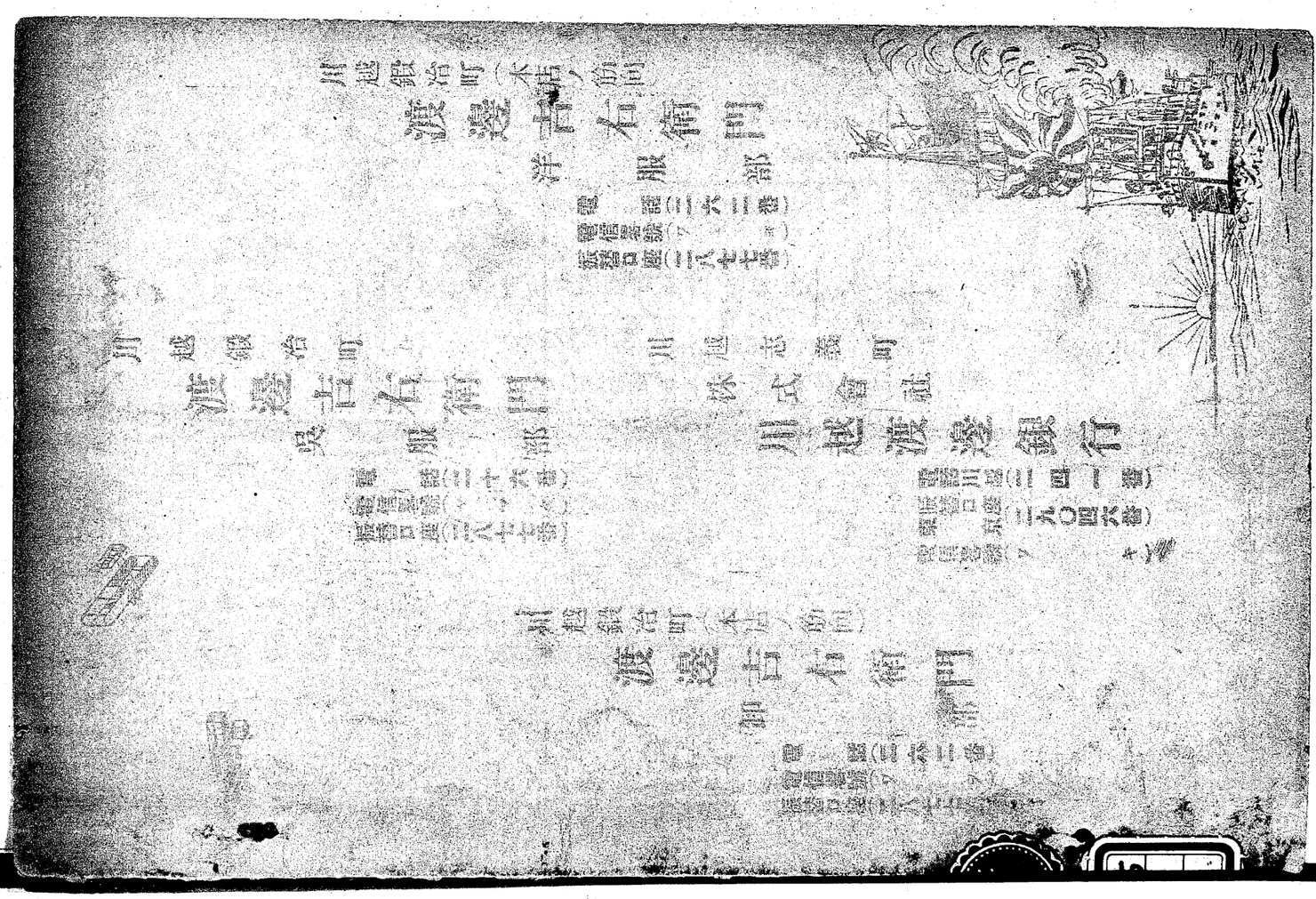
大正三年十一月一日印刷
大正三年十一月五日發行

埼玉縣入間郡川越町四百九拾番地
發行兼編輯人　渡邊吉右衛門

埼玉縣入間郡川越町千四百五拾壹番地
印刷人　青山博吉

埼玉縣入間郡川越町千四百五拾壹番地
印刷所　青山印刷所

非賣品


川越鐵治町（本店、銅山）
波邊石衛門
洋服部
川越鐵治町
波邊石衛門
呉服部
川越鐵治町
株式會社
川越波邊鐵石
川越鐵治町（本店、銅山）
波邊石衛門
帽子部